トルファン・トユク石窟の考古学的新発見

――五世紀高昌の仏教図像に関する試論――

李　裕　群

森美智代　訳

一、発掘の概況
二、発掘の主な成果
（一）東岸区北部石窟群
（二）西岸区北部石窟群
（三）東岸区南部の地面寺院
（四）出土遺物
三、関連する諸問題の考察
（一）トユク石窟の草創年代について
（二）石窟の組合せ
（三）五世紀高昌における仏教図像の構成
四、結論

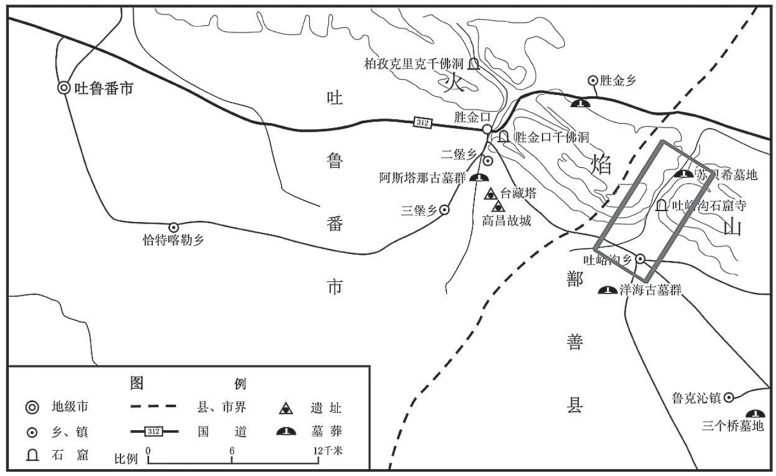
一、発掘の概況

トユク石窟は、新疆トルファン地区鄯善県吐峪溝（トユク）郷吐峪溝麻紮（トユクマザール）村にあり、吐魯番市から西に約六〇キロ隔たっている（挿図1）。トユク溝は火炎山山脈東部に位置し、ほぼ南北方向に流れている。北は蘇貝希（スバシ）に通じ、南は洋海に臨み、全長八キロメートルである。古来、トユク溝は火炎山を南北に貫通する主要な交通路の一つであった。

石窟は、主にトユク溝南部の東西両側の断崖に開鑿されている。現存する石窟は約百窟余り、そのうち壁画が現存する石窟は九窟で、その他は主に僧房や禅窟など、生活に用いられた窟である。今回の調査を通じて、トユク溝両側の山上にも多くの地面寺院址があることが明らかになった。石窟が初めて開鑿された年代はおそらく高昌郡時代（四―五世紀前後）で、唐の西州時代まで途切れることなく存続した。後の高昌回鶻時代（九―十三世紀）には、主に石窟の重修と地面寺院の造営が行われた。

トユク石窟は、トルファン地域において開鑿年代が最も早く、規模が最大の仏教石窟遺跡群であり、古代シルクロードにおける重要な仏教関連遺跡でもある。二〇〇六年、トユク石窟は中国国務院により第六次全国重要文物保護単位に指定され、同年、世界文化遺産申告予備リストにも入れられた。

石窟寺院が開かれている火炎山の山体の崩壊は極めて深刻であり、現存す



挿図1　トユク石窟遺跡群の位置（筆者作成）

る石窟遺址にとって大きな脅威となっている。また、相当数の石窟がほぼ土砂に埋もれた状態にあった。そこでシルクロード（新疆地区）を世界文化遺産に申告するという重要プロジェクトと、危険状態にある岩体の補強工事に歩を合わせ、中国社会科学院考古研究所・吐魯番研究院・亀茲研究院は連合考古隊を組織し、二〇一〇年からトユク石窟寺院遺跡群において保護のための発掘を実施した。

発掘作業は二〇一〇年春季から二〇一一年春季まで継続して実施した。主に、東岸区北部石窟群、西岸区北部石窟群と、東岸区南部の回鶻時代の地面寺院一箇所を発掘した。新たに壁画が現存する早期中心柱窟二箇窟が発見され、石窟の他にも多数の重要な窟前建築址（前殿・床・門道・階段）と登山のための階段道の発見があった。また多様な言語・文字による大量の文書断片や、絹画、木器、石器、陶器、彫塑、文具、生活用品なども出土している。[1]これらの新発見は、トユク石窟の草創年代・石窟の形式と主題構成・石窟の組合せや、トユクと新疆クチャ地域の古代亀茲石窟・ホータン地域の仏教寺院・甘粛省河西回廊の早期石窟との関係といった問題について我々に新たな認識をもたらすものであり、重要な学術的意義を有するといえよう。

二、発掘の主な成果

（一）東岸区北部石窟群

東岸区の石窟群はトユク石窟で最も早く開鑿された区域であり、これまでに六〇箇窟前後の石窟が知られている。今回、主に発掘したのは東岸区北部の石窟群で、峡谷の入口からは一五〇〇メートルほど距たっている。計五六箇窟の整理作業を行ったが、この中には礼拝窟・禅窟・僧房窟や、その他の生活のための施設等が含まれる。その南側に隣り合う崖面には、約四箇所の石窟遺址を判別できる。過去の石窟編号（例えば、吐魯番文物局による編号では東岸・西岸の両地区を合わせて四六窟が編号されている。その正式な発表は未だなされていない）と石窟の実際の状況の差は大きく、編号から漏れている石窟や、一つの石窟に誤って複数の番号が与えられているケースがあった。そこで、我々は今回の発掘整理の過程において新たに編号を行った（挿図2）。

この区域の中ほどに小さな峡谷があり、区域を南北二つの部分に分けている。この谷より北側に新編号K一―K二六窟、南側にK二七―K五六窟がある。小峡谷の北側では石窟は上下四層に重なり、新編号K一八窟（旧三六窟）を中心として一つのグループを構成している。小峡谷の南側でも石窟は上下

挿図２　トユク石窟東岸区編号（筆者作成）

四層にならび、新編号K二七窟（旧三八窟）、K三一窟（旧四〇窟）、K五〇窟（旧四四窟）の三つの礼拝窟を中心とする三つのグループにおおよそ分けられる。新発見の登山階段は、谷底から小峡谷沿いに両側の石窟に達しており、小峡谷が形成されてから既に長い時間が経過していることがわかる。

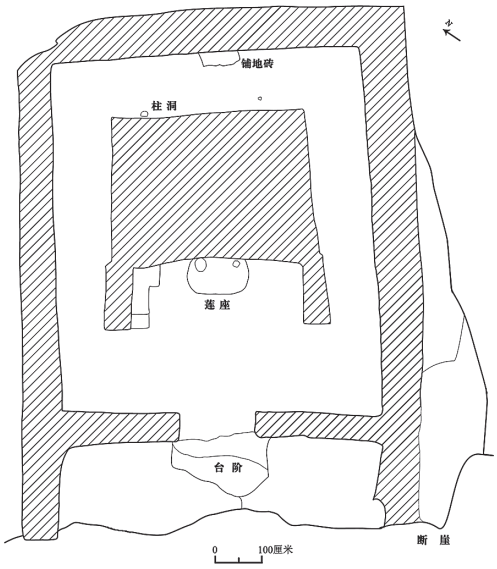
東岸区で最も重要な石窟は、新編号K一八窟である。同窟は、ロシア・サンクトペテルブルグ科学院の考古学者、クレメンツ（Demetrius Klementz）による編号の第六窟にあたる。[2] ロシア・ドイツ両国の探検隊の記録から、[3]（補註1）同窟は一九一六年にトルファンが六級の地震の被害に遭った後に崩落したと推測される。[4] それ故、この後に来た学者の調査はいずれも同窟に及んでいないのである。

1　石窟形式

K一八窟は中心塔殿窟である。その建造方法は些か珍しく、地山の斜面を垂直に堀り下げて、石窟の床面と中心柱を鑿出している（挿図3）。鑿出した中心柱の周りを日乾煉瓦で囲み、四面は山体に拠って日乾煉瓦を積んで壁をつくり、窟内の床に方塼を敷く。

同窟はほぼ西面し、前廊と主室を備えている（挿図4）。主室平面は縦長方形を呈し、幅六・三メートル、奥行八・四メートルである。中心柱は窟のやや後部に寄り、平面は正方形に近く、残高三・七五メートルである。中心柱前部両側に日乾煉瓦を積んで翼壁をつくる。主室の西壁に窟門を開いており、この窟門南側の壁体が崩壊している他は、壁体は比較的よく保たれている。窟門の前には出入りのための階段が形をとどめている。窟内は中心柱を繞る左・右・後の三面を均しくヴォールト天井式の甬道とし、塔を繞って礼拝することができる。現在、甬道の頂部は既に崩落しているが、復原すると

挿図３　K18 窟俯瞰　北から南を望む（2010 年筆者撮影）



図三　K18平面図

挿図４　K18 窟平面図

高さ三メートル余りであったと見られる。石窟前部の天井は既に崩落しており、窟頂の形式は不明である。窟内の床面には方磚を敷いており、今も幾つかの残塊が残っている。

K一八窟の下にK二五窟があり、K一八窟と上下に組み合せられて一グループを構成する。K二五窟は幅三間の仏殿窟であり、三方の壁面には三層の壁画が描かれていたことが明らかにみとめられるものの、壁画内容の弁別は極めて困難である。仏殿の床面にも磚を敷いた痕跡がある。K一八窟の南側に、上下二層から成る一組の僧房窟がある。K一八窟の上層の後側にも一組の僧房窟がある。

2　壁画内容

窟内の尊像は、塑像と壁画を結合させた手法で制作される。中心柱窟の正（西）壁はわずかに内側に刳れた曲面をなし、壁面全体に大型の舟形光背を塑造する。光背の前には本来、大型の立仏塑像があり、これが窟内の礼拝・供養の中心であった。大立像は早くに損壊し、現在は大型の光背と蓮華座が残存するのみである（挿図５）。蓮華座は宝装覆蓮式であり、直径は一・三二メートル、高さは〇・四〇メートルである。蓮華座上には二つの木鑿孔が残っており、塑造立像の木芯を差し込んでいたものと見られる。残存する光背の状況から、立像の高さはおそらく甬道の頂部をさらに一メートル以上超えていたとみられ、本来は四メートル以上あったと見積られる。

石窟前部の左右壁体と前壁の壁画は全て現存しない。石窟後部の南・北・東（すなわち左・右・後）甬道の周壁には壁画を描いており、壁画は石窟の崩落のため部分的に損壊する。浸水等の原因により、壁画の表面には部分的に泥の層が形成されており、壁画内容の判別を困難にしている。

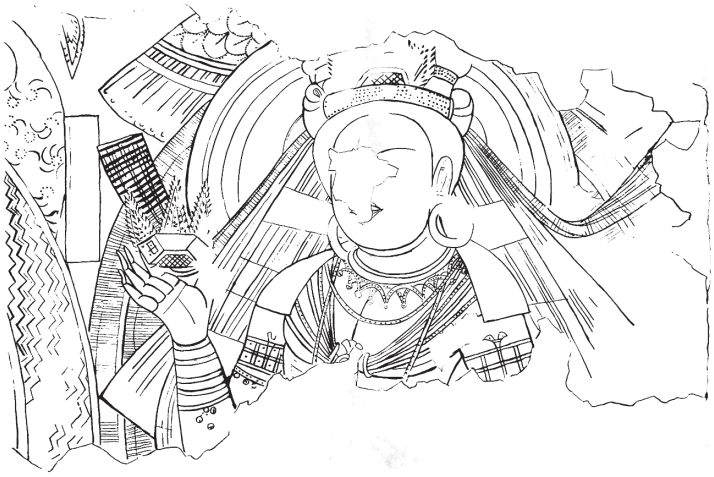
中心柱窟南壁（南甬道の北壁）　壁面全体に大きく一仏二菩薩の像を描く。主尊は大型の立仏像で、頭部は毀損され、偏袒右肩に袈裟をつける。身体は豊満で、肩が広く腰は細い。左手を挙げて左胸前で袈裟の衣端を握り、右手を挙げて第一・二指を捻じる。腰から下は欠損する（挿図6）。身光を伴い、その上方に花卉樹蓋を描く。左側の菩薩は頭部に六角柱状の火炎宝珠を伴う冠を戴き、面部は縦長の円形で、両耳に大きな耳輪、頭部の両側に冠帯をつける。身に華麗な首飾りと臂釧をつけ、手に六角柱状の火炎宝珠を執る。頭上には羽毛製らしき傘形華蓋がある。頭光・身光を伴う。胸部より下は欠損する（挿図7）。右側の菩薩は既に全壊しているが、グリュンヴェーデル（Albert Grünwedel）の描き起こし図によると、頭部に三面円盤宝冠を戴いており、冠正面の円盤の中には化仏が描かれ、グリュンヴェーデルはこれを観音菩薩とみている。この右側の菩薩像が身につける装飾も左側の菩薩像と同様である（挿図8）。

下部には一列の供養弟子群像を描く。約十八体あり、うち比較的よく保存されているのは三体である。頭部をややうつむけ、顔を西側に向け、面相はまろやかで、偏袒右肩に袈裟をつけ、手にS字を連続させた形状の花茎を持ち、足を交差させて立つ。体部の前に短冊形があるが、字は書かれていない。弟子像の多くは模糊とする。

中心柱北壁（北甬道南壁）　中心柱南壁と相同で、壁面全体に大きく一仏二菩薩像を描く。主尊は大型の立仏像で、肉髻と地髪は藍色、面部は欠損する。

挿図5　K18窟西壁および南甬道（2010年筆者撮影）

挿図6　K18窟中心柱南壁の立仏像と左側の菩薩像（2010年筆者撮影）



挿図7　K18窟中心柱南壁左側の菩薩像 描き起こし図

挿図８　K18 窟中心柱南壁右側の菩薩像 描き起こし図

偏袒右肩に袈裟をつけ、手勢は中心柱南壁の仏像と同様に左手で袈裟の衣端をとり、右手の親指と人差し指を捻じる。腹部より下は欠損する（挿図９）。身光を負い、身光の上部に花卉樹蓋を描く。左側の菩薩像は頭部が残存する。右側の菩薩像の頭上の冠飾は判然としない。頭部の両側にそれぞれ二条の冠帯をつけ、一条は上方に翻り、もう一条は斜め下方に垂下する。頭上には羽毛製らしき傘型華蓋がある。二菩薩と仏の間には短冊形があるが、文字を書いた痕跡は見えない。壁面下部は剝落が甚だしく、供養者が描かれているか否かは明らかではない。

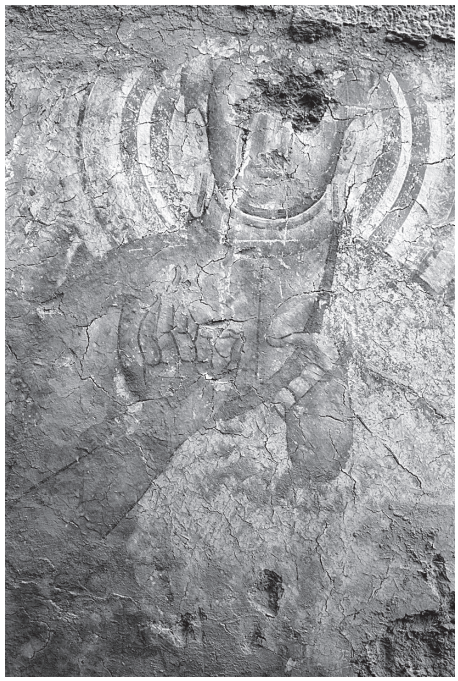
中心柱東壁（後甬道西壁）　壁面中部から上部にかけて日乾煉瓦の崩落のため壁体が欠損する。グリュンヴェーデルの記述によると、壁面中央に大型の如来像が極めて特殊な形の宝座上に坐し、その左右は二脇侍像（おそらく菩薩）であることが当時は断定できたらしい。もしグリュンヴェーデルの記述が確実であるならば、これは一仏二菩薩像ということになる。もっとも、彼の言う宝座は現在も一部が残っているが、壁面の中央ではなく北寄り、すなわち下部の菩薩列像八体の北側にあり、形状から判断して柱とみられる。柱の北側にも画像があるが、残念ながら模糊として詳細は不明である。したがって、東壁の尊像構成にはなお疑問が残る。

壁面下部の中間は八体の菩薩の列像である。いずれも頭上に冠を戴き、上方を仰ぐ。仰ぎ見ている対象は、既に欠失した主尊の画像であったに相違ない（挿図10）。

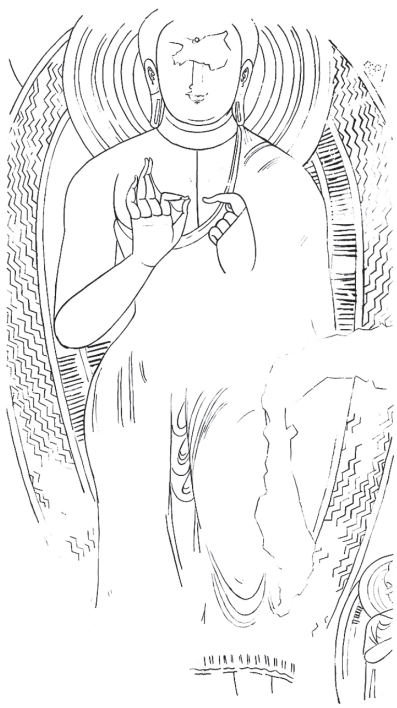
挿図９　K18 窟中心柱北壁の一仏二菩薩像（2010 年筆者撮影）

挿図 10　K18 窟中心柱東壁下層の菩薩像（部分）描き起こし図

南甬道南壁　中心柱南壁と対面する壁面の中央に大型の一仏二菩薩立像を描いており、その高さは二メートル以上である。如来像の肉髻は欠失し、地髪は青色で、面部は卵形を呈する。身体は豊満で、偏袒右肩に袈裟をまとう。袈裟の衣文は判然としないが、両腿の間に鉤形を呈する重厚な衣褶がみとめられる。手勢は同窟の他の如来像と似て、右手の第一指と第二指を捻じ、左手は袈裟の衣端を握るようにみえるが判然としない。両脚部が残存する（挿図11、12）。身後に頭光と身光がある。左側の菩薩像は、頭部の両側につけた帯が上方に翻り、頭部は眼より上は欠損し、両耳に環状のイヤリングをつける。同像に特殊なのは下顎に山羊髭を描く点で、これまでに類例が知られていない。また華麗な首飾り、臂釧・腕釧で身を飾り、合掌する。上半身は露わにし、腰に連珠文をほどこした裙をつける（挿図13）。右側の菩薩像は腰より下のみ残存する。仏と左側の菩薩の脚の間に一体の小仏像を描く。袈裟を通肩につけ、面を主尊の如来像に向ける。左側の菩薩像の西側は、鎧甲をつけた龍王像である。頭部は模糊とし、頭光を伴い、雲形と二頭の龍が今も残存する。グリュンヴェーデルの記述と線描画によると、龍王像は頭部に亀茲式の火炎宝珠冠をつけ、左手を腰に当て、右手は欠失する。頭上に龍四匹がおり、雲中から首を出す。龍の頭部は中国式である（挿図14）。龍王の



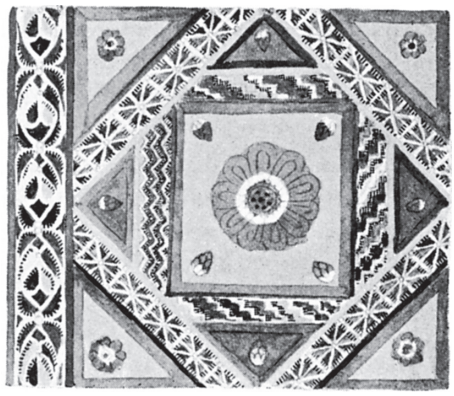
挿図11　K18窟南甬道南壁の仏像



挿図12　K18窟南甬道南壁の仏像 描き起こし図

挿図13　K18窟南甬道南壁左側の菩薩像 描き起こし図

挿図14　K18窟南甬道南壁の龍王像 描き起こし図


挿図15　K18窟 窟頂図案描き起こし図

西側には縦に装飾文帯を設け、壁面を区画している。装飾文帯より西側（甬道の外部、主室前部にあたる）は、上部に千仏、下部に女性供養者像を描く。現状では千仏は上下二列が見られ、比較的明瞭に見える二体は、袈裟がそれぞれ通肩と双領下垂式に描き分けられている。女性供養者像は判然としないが、中国式の服制と見られ、西を向く。壁面を通じて下部に三角の帳幕文等を描く。

北甬道北壁　損壊が甚だしいが、痕跡からみてやはり一仏二菩薩像と見られる。如来像と左側の菩薩像は殆ど残らない。右側の菩薩像は胸部が残り、華麗な首飾りと腕釧がみとめられる。右側の菩薩像の西側は縦に装飾文様帯を設け、さらにその西側には千仏を描く。上下二列が現存し、三体がみとめられる。壁面下部は甚だしく損壊し、供養者が描かれていたか知るよしもない。

後甬道東壁　表面はほぼ泥で覆われ、現状では大型の菩薩像一体を判別できる。但し、位置が南寄りで顔は南に向けており、北向きではない。したがって、本菩薩像は一仏二菩薩像の他にも尊像を描いていたものと思われ、東壁は一仏四菩薩像の組合せであったと推測される。今後、壁面のクリーニングを経た上での確認を待ちたい。

左右甬道の頂部には、本来、方形のラテルネンデッケ図案を描いていた。グリュンヴェーデルの記述と線描図によると、全部で七区があった。各図案は二つの正方形を四十五度ずつずらして入れ子式に組合せ、さらに中心の方形框の中に大きな蓮華文を描き、その四隅にも一つずつ小さな蓮蕾を配している。方形框の縁装飾は複雑であり、忍冬文、半蓮華、環形、羽毛文、X字形、波形文等の装飾図案を連続して描く（挿図15）。後甬道頂部は一部が残存しており、壁画内容は左右甬道と相同である。

主室前部は、天井が崩落してから長期にわたって外に曝されたため、先述の南北壁に残る千仏を除く壁画は既に失われている。

南甬道に並んだ比丘および俗人女性供養者から判断して、本窟は僧侶と俗人信者が共同で造営したのであろう。

（二）西岸区北部石窟群

西岸区石窟群は、東岸北部石窟群の正面の山体が褶曲する角の山腹に位置する（挿図16）。山体の崩落のため、遺跡の損壊は甚だしい。上下に少なくとも四層の結構がある。最上層は、最も西側の一僧房窟が残存するのみである。第二層の遺跡もほぼ全壊するが、最も東寄りの中心柱窟のみ残存する。第三層はなお部分的に残存する。最下層の第四層のみ、保存されている遺跡が比較的多い。

西岸区の最も重要な礼拝窟は、NK二窟（中心柱窟）である。石窟群東端の最も高い場所に位置し、地山を削って造営されている。開鑿の方法は東岸区のK一八窟と類似しており、後甬道のみ山体の内部を直接掘り込んでい

る。左右甬道と中心柱は斜面を上から堀り下げ、上部に日乾煉瓦を積んで形成するが、その前部は既に倒壊している。甬道の地面に白灰を塗る。

1 石窟形式

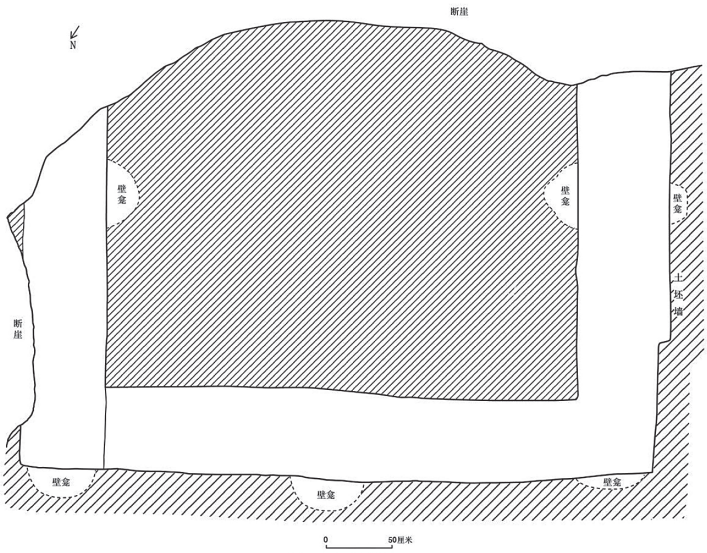
NK二中心柱窟は南面して開鑿される。石窟前部が既に倒壊しているため、平面プランは不明である。石窟の幅は九・四メートル、奥行きは現状で四・八二メートルである。中心柱の幅は七・四メートル（挿図17）。左右甬道中央の壁龕の位置から推測して、中心柱の奥行きは約七メートル、平面は方形であったことがわかる。窟内の中心柱をめぐる左・右・後の三面は、いずれもヴォールト天井式の甬道である。

挿図16　トユク西岸区北部石窟 発掘後の全貌（2011年筆者撮影）

2 壁画内容

窟内の尊像は、塑像と壁画を結合させた手法で制作される。窟の前部は悉く損壊しており、中心柱正面の塑像の形状は最早知るよしもない。

後（北）甬道は比較的よく保存されており、全長九・四メートル、幅一メートル、高さ一・九メートルである（挿図18）。後甬道後（北）壁の中部と両端にそれぞれ龕を開く。龕内の像は既に失われており、ただ光背が残るのみである。中央の龕は、両端の龕に比して天井が低く、奥行きが深い。龕内には台座を設け、後壁に光背、龕外上方に華蓋を描く。華蓋の高さは龕外両側に描かれる仏立像頭上の傘蓋のそれと一致していることから、龕内には本来、仏坐像を塑造していたことがわかる。両側の龕は、龕高が高く、奥行き



挿図17　西岸区NK2窟 平面図

挿図18　西岸区NK2窟 後甬道（2011年筆者撮影）

挿図19　西岸区NK2窟 後甬道後壁の仏像のうちの一体（2011年筆者撮影）

が浅い。残存する光背から判断して、本来、立像を塑造していたと見られる。中央と両側の龕の間には大型の仏立像四体を描く（挿図19）。仏像は頭部の比例がやや大きく、肉髻と地髪は青色で、赤褐色の袈裟を偏袒右肩につけ、太い線と細い線を用いて重厚な生地のたたむ衣文の質感を表現する。足を交差させ、蓮華を踏む。手勢はそれぞれ異なっており、立仏の一体は手に鉢をとる。頭光・身光を伴い、頭上に傘蓋もしくは華蓋がかかる。立仏の間には花などの図案を描く。立仏の下部には、三角文の装飾帯を描く。後甬道（南）壁には龕を開かず、立仏の列像を描くが、損壊が甚だしく、頭光と宝蓋が部分的に残存するのみである。痕跡から、約七体の立仏像が描かれていたと見られる。些か特異なのは、甬道西端の角に二体の珍しい姿をした護法神の類の像が描かれていることで、これらは従来知られていなかった人物表現である（挿図20）。上方の一体は髻を結い、耳が尖り、耳璫をつける。顔は右上方を仰向いて、口を僅かに開く。両腕を開き、披帛をまとう。上半身を露わにし、連珠文の瓔珞と臂釧をつける。腰に短裙をつけ、脚を少し曲げて、奔走するかのような姿である。下方の一体は禿頭で、容貌は獰猛であり、左前方を向く。左手を挙げて頭頂におき、右手は前に伸べ、手に執った縄状のものを口に銜える。胴以下は欠損する。

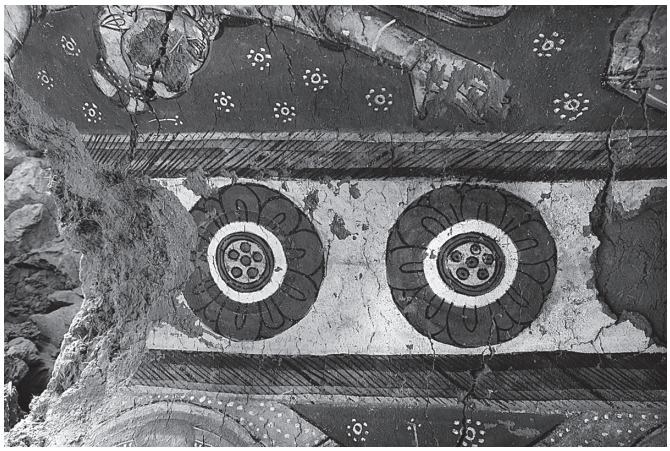
挿図20　西岸区NK2窟 後甬道前壁護法神像（2011年筆者撮影）

頂部には一列の蓮華を描く。蓮華の意匠は、東岸区K一八窟の窟頂ラテルネンデッケ中心の蓮華と一致する（挿図21）。

西甬道両側壁の中部にはそれぞれ一龕を開く。龕内の塑像はいずれも欠失する。東壁龕の内部には仏像の光背が残存し、光背の北側に独特な形姿の人

物像一体を描く。頭部は判然とせず、上半身には右肩を露わにして衣をつけ、腰に短裙をつけ、足を前後にして歩く姿である（挿図22）。この人物像はおそらく外道であろう。東壁龕の北側に立仏像三体を描いているが、その形像は模糊とする。西壁龕の北側には立仏像四体を描くが、最も北側の一体のみ保存状態が良好である。袈裟を通肩につけ、足を交差させて蓮台を踏む。仏像の両側に火焔宝珠、下部に三角帳幕文を描く。

東甬道の西壁中部に一龕を開く。龕内には塑造仏像の双足と手指の断片が残り、本来、立仏像を塑造していたことがわかる。東壁はほぼ完全に倒壊しているものの、西壁と対称を成していたと考えられることから、やはり中部に一壁龕を開いていたであろう。壁面は長期にわたって外部に曝されていたため、東甬道の壁画は失われている。



挿図21　西岸区NK2窟 後甬道頂部の蓮華（2011年筆者撮影）

中心柱窟の西側は、地付きから中心柱窟の窟頂まで同じ高さで日乾煉瓦積みの大壁が残存しており、壁体の幅は約一メートルである。この大壁により、中心柱窟とその西側の石窟群が二つに分断されている。窟前東側（補註2）には、後代に大壁の前に長方形の台が増築されたが、この台が崩れたことにより大壁西面の当初の壁画が露出した。大壁西面の下部には忍冬文を描き、上部は朱色の界線をひいて横長方形に区画し、それぞれの区画内に一幅の故事画を描いている。三幅が現存し、それぞれ榜題を伴う。榜題の字体は楷行書であるが、隷意が脱けていない。最北の一幅には、髪をふり乱した女性が火の燃えさかる山上に仰向けに臥す様が粗い線で描かれ、榜題の「如是苦時」の四字が明瞭に認められる。この画幅があらわす内容は、おそらく地獄における受苦と関連するものであろう。中間の一幅では、北側に人物の赤い足、南側に獣の足が明らかに認められる。以上の状況は、ＮＫ八窟の前部が、当初、礼拝施設に属する建築であったことを示している。

挿図22　西岸区NK2窟 西甬道東壁龕内の人物像（2011年筆者撮影）

挿図23　西岸区僧房窟群（2011年筆者撮影）

挿図24　西岸区NK10窟後壁 ウイグル文字題記（2011年筆者撮影）

挿図25　トユク南部新発見のウイグル時代地面寺院（2011年筆者撮影）

中心柱窟より西側には、同窟よりやや低いレベルに禅窟二箇所が残存する。最も低い層には二グループの僧房窟が露出している。いずれも縦ヴォールト天井で、後壁に小禅窟一所もしくは壁龕を開く。この二グループの僧房窟のいずれにも後期に改修した痕跡がみとめられる。東側のグループは僧房窟三窟があり、一つの前室を共有している（挿図23）。前室の東壁は、上層の中心柱窟西壁を下に延長したもので、ここから上層の中心柱窟と下層の僧房窟のグループが同時期に造営されたことがわかる。このうち一箇所の僧房窟は、後壁全体にウイグル文字の墨書がある（挿図24）。その内容については解読を待たねばならないが、少なくともこれら北部石窟群が高昌回鶻時代においてもなお使用されていたことは明らかである。

（三）東岸区南部の地面寺院

本寺院址は東岸区南部に位置し、吐峪溝石窟修復隊が石窟参観のための歩道の修築を行った際に発見された。これまでに発掘された部分には、仏堂一所と一群の居住・生活施設が含まれる。

仏堂は南側にあり、前室と後室に分かれる。前室は長方形プランで、幅七・四メートル、奥行約三・五メートル（挿図25）。前室中部に四段の階段があり、下層に通じる。後室の平面は方形を呈し、幅と奥行が五・八メートルである。階段の幅は約一メートル、その両側は後代に土盛りして舗道とされた。日乾煉瓦を組んで壁を築いており、壁体の厚さは約一メートル、残高約〇・六五～一・八メートルである。堂内は、赤土を焼成した方塼で床を舗く。堂内中

部やや後寄りに像を安置するための壇を設けるが、塑像は損壊している。堆積した土の中から塑像の破片が出土し、塑像に金箔と彩色が施されていたことがわかった。仏堂の周壁の下部には壁画が残存しており、壁画は部分的に金が用いられている。正壁には一列の神獣を描いており、足と爪の部分が残る。左右側壁と前壁には礼仏するウイグル人供養者の行列が描かれ、一部の供養者像はウイグル語題記を伴う（挿図26）。ここから、本寺院址が高昌回鶻時代に建てられたことがわかる。

挿図26　地面寺院ウイグル人供養者像と題記（2011年筆者撮影）

挿図27　トユク石窟東岸区出土『大般涅槃経』写本断片

（四）出土遺物

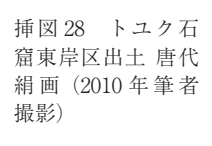
東岸・西岸両区からは大量の遺物が出土しており、その中で最も重要なのは文書類である。初歩的な見通しでは、大小の断片は一万点近く、まとまった文書も数百件にのぼり、建国以来の新疆地域における発見数としては最多である。文書の内訳は仏典写経が最も多く（挿図27）、その他に世俗文書や古籍の注釈などがある。文字は漢文が主で、その他にも古代西域で使用されたソグド文字、ブラフミー文字、チベット文字、古ウイグル文字などがある。とりわけ貴重なのは漢文とウイグル語バイリンガルの対訳仏典である。一部の文書は保存状態がほぼ完好で、しかも紀年題記を有する。また経巻の軸ごと残るものもある。文書の字体は最も早いものは四～五世紀、最も下るものは高昌回鶻時代頃の特徴を示す。これ以外にも、絹画（挿図28）、紙画、染織品やその他の文物が出土している。以上はトルファン歴史文化の研究のための貴重な新資料を提供するものといえよう。

三、関連する諸問題の考察

トユク石窟の考古学的新発見は、トユク石窟の開鑿年代、石窟の組合せ、及び五世紀高昌の仏教図像構成に反映された諸問題について、我々に新たな認識をもたらすものである。

（一）トユク石窟の草創年代について

トユク石窟の草創年代について、従来の研究では東岸区K五〇窟（旧四四窟）等の石窟が最も早く開鑿された一群であると見なされてきた。例えば、賈応逸女史は吐魯番文物局が編号した四六箇窟について考察し、トユク石窟の現存する石窟の年代は大体において五胡十六国時代と麴氏高昌国時代の二つの時期に分けられるという。前者は旧編号の第四〇窟、第四一窟、第四二窟、第四四窟に代表され、後者は旧編号の第二窟、第一二窟、第二〇窟、第三八窟に代表される。このうち、K五〇窟（旧四四窟）窟内の四壁には二一幅の本生図と因縁故事図が描かれている。画面には漢文榜題が附されており、今も判読できるものに「毘楞竭梨王本生」、「忍辱仙人本生（羼提波梨品）」、「曇摩鉗太子本生」、「慈力王本生」、「尸毘王本生」がある（全て北涼慧覚等訳出の『賢愚経』所出）。K五〇窟の構成、主題、絵画の特徴は敦煌莫高窟の早期窟である第二七五窟と非常に似ているため、同窟の年代は五胡十六国の北涼が高昌を支配していた時期と考えられるという。[5] 柳洪亮氏はトユク石窟旧編号の第一窟、第四〇窟、第四二窟、第四四窟を高昌郡時代（補註3）（三一七―四四二年）の開鑿と見る。このうち第四四窟の壁画内容は、『賢愚経』所出の「毘楞竭梨王」等の本生故事以外にも、『雑法蔵経』所出の「蓮華夫人縁」、「婆羅門婦欲害姑縁」が見られる。よって、その開鑿年代は四五〇年を降らず、北涼の流亡政権の沮渠安周が造営した功徳窟で、四六〇年に完成した可能性が高いという。[6]



挿図28　トユク石窟東岸区出土 唐代絹画（2010年筆者撮影）

実際は、新編号K五〇窟（旧四四窟）の年代はもう少し早いと考えられる。同窟の多くの要素は確かに敦煌莫高窟早期窟（第二七五窟）と非常に近いものの、莫高窟第二七五窟を年代判定の根拠とするのは些か無理がある。まして、莫高窟早期窟自体の年代が北涼時代の開鑿か否かについても疑問が残る以上、[7] 我々はK五〇窟（旧四四窟）の主題から分析を行う他ない。前述の諸先学の考証によると、同窟の本生図と因縁故事図が依拠する経典は『賢愚経』と『雑宝蔵経』である。梁の僧祐の『出三蔵記集』巻二「新集撰出経律論録第一」の記載によると、

『賢愚経』十三巻、宋元嘉二十二年出、右一部、凡十三巻、宋文帝時、涼州沙門釈曇学、威徳、於于闐国得此経胡本、於高昌郡（天安寺）訳出、[8]

とあり、同窟の壁画年代が宋の元嘉二十二年（四四五）を遡らないことがわかる。柳洪亮氏が考訂されたように、「蓮華夫人縁」と「婆羅門婦欲害姑縁」の二つの因縁故事は、漢訳仏典中では『雑宝蔵経』のみにしか見えない。[9] 梁僧祐『出三蔵記集』巻二「新集撰出経律論録第一」によると、

『雑宝蔵経』十三巻（闕）、『付宝蔵因縁経』六巻（闕）、『方便心論』二巻（闕）、右三部、凡二十一巻、宋明帝時西域三蔵吉迦夜於北国、以偽延興二年、共僧正釈曇曜訳出、劉孝標筆受。此三経並未至京都、[10]

とあり、本経が翻訳されたのは北魏延興二年（四七二）のことである。それゆえ、もしこれら二幅の因縁故事図が上述の経典に拠って描かれたとするな

らば、その制作年代は四七二年以後でしかあり得ず、柳洪亮氏が壁画の完成を四六〇年としたのは問題があるということになる。北魏の平城において訳出された『雑宝蔵経』が高昌に伝わるまでには一定の時間を要することを考慮するならば、当窟の壁画年代は北魏が洛陽に遷都する以前の孝文帝の在位期間、即ち四七二年から四九四年までの間と考えるのが比較的妥当といえよう。

このように、トユクの所謂北涼時代（或いは高昌郡時代）開鑿窟は、従来知られてきた石窟に関してはこのような年代比定が成り立ち難い。一方、新発見の東岸区・西岸区の礼拝窟は、開鑿方法、窟形式、壁画主題と様式のいずれもK五〇窟（旧四四窟）などの早期窟と異なっており、より早い時期の特徴が、以下に述べる如く明らかに現れている。

第一に、新発見の二箇所の礼拝窟は、いずれもそれぞれの区域で規模が最大の石窟であり、位置も優越している。伝統的な意味における石窟の開鑿方式とは異なり、いずれも山の斜面を利用し、斜面を上から垂直に堀り下げて窟の床面と中心柱をつくり、さらに日乾煉瓦を積み上げる。K一八窟を例にとると、同窟は東岸区北部の最も枢要な位置にあり、峡谷の出口の方を向く。峡谷の内部に入るとまず目に入るのが、すなわちK一八窟の雄壮な石窟建築である。石窟の開鑿順序の観点では、一般的にいって最も好条件の崖面がまず利用される。これを踏まえるならば、同窟は東岸区で最も早く開鑿された可能性がある。

また、ル・コックが一九〇四年の調査時に撮影した写真をみると、新編号K一八窟の頂部はまだ崩落しておらず、本尊の光背もほぼ完存している。驚くべきことに、中心柱の上面には覆鉢式ストゥーパが立っている（現在は欠失）。塔には二層の方形の基座があり、その基座の上が球状を呈する覆鉢となり、立像の光背の尖頂部は基座第一層の正面に直接塑造されている。この種の方形覆鉢式塔は三～四世紀の楼蘭LA. XI仏塔[11]、ニヤの大仏塔、カシュガルの莫爾（モール）仏塔の形式に近く、早期仏塔の形式といえるが、トルファン地区の仏教寺院址では稀である。このことは、K一八窟の開鑿年代が大きく下らないことを示している。

次に、新発見の二箇所の礼拝窟はいずれも中心柱窟であるが、中心柱をめぐる左・右・後の三面は低いヴォールト天井式の甬道となっており、亀茲石窟の中心柱窟と大仏窟に比較的近い。一方、トユク石窟K二七窟（旧三八窟）、西岸区第二窟、第一二窟の甬道は中心柱と高さが等しい。この種の形式は河西回廊の酒泉文殊山石窟の中心柱窟や、張掖馬蹄寺石窟第一窟と基本的に同じであり[12]、トユク中心柱窟の形式の変遷――すなわち亀茲式の低い甬道から河西回廊の石窟に多く見られる高い甬道へ――を反映したものといえる。したがって、件の両礼拝窟の形式は、トユクの従来知られていた石窟の特徴より早い時期のものであることを示すものである。

壁画の主題と様式を見ると、K一八窟では大型の一仏二菩薩像の構成が見られるが、これは中央アジアのガンダーラの造像に多く見られる題材である。とりわけ、K一八窟の仏像が左手を胸前において袈裟の衣端を握ることは、ガンダーラ仏に多く見られる表現と同様である。ガンダーラの影響を受けて、例えば雲崗石窟第一八窟本尊立仏など、五世紀中国北方の造像においてもこのような表現が流行した[13]。K五〇窟（旧四四窟）の如来像は偏袒右肩に袈裟をつけ、右肩に偏衫を見せ、菩薩像の首飾り・臂釧・腕釧といった装飾は前者（K一八窟）ほど華麗ではない。これらの特徴は敦煌北魏窟や酒泉文殊山石窟の説法図中の仏像と一致しているが、同様の袈裟の着用法はK一八窟とNK二窟には見られず、これら二窟がK五〇窟より早いことは明ら

挿図29　ホータン・ラワク仏教寺院址回廊立仏群像

かである。

西岸区中心柱窟のNK二窟は、東岸区K一八窟と谷を挟んで相望む位置にあり、西岸区で最も早く開鑿された石窟である（西岸区のこの他の石窟は麴氏高昌国期と唐西州期の開鑿）。後甬道に立仏の列像を描いており、立仏の面相は豊かな丸顔で、袈裟の衣褶は密で重厚であると同時に充実した身体を際立たせている。これはガンダーラ仏の着衣表現と比較的に近い。甬道の両側に立仏の列像を配することは、ホータン洛浦（ロプ）県西北の砂漠地帯にあるラワク寺院址と類似する。ラワク寺院址は三～四世紀頃に位置づけられ、大型ストゥーパを中心として周囲に回廊がめぐらされる形式で、曾てスタイン（Marc Aurel Stein）がこの東南回廊部の発掘を行っている。発表されている図版から、回廊の内外には大型の立仏像が列を成していたことがわかる（挿図29）。仏像の衣文は稠密かつ重厚であり、ガンダーラの造像に近い。[14] したがって、NK二窟はおそらくホータンのラワク寺院から形式・主題の影響を受けており、年代はこれを大きく下らないものと考えられる。

上述の諸点を踏まえるならば、二つの礼拝窟は五世紀初めに開かれ、トユクの石窟群の中で開鑿年代が最も早い窟であると試考できよう。

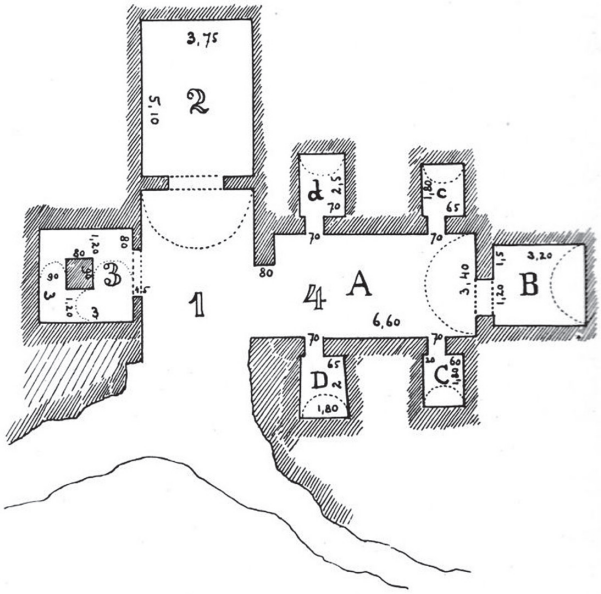
（二）石窟の組合せ

先行研究における主要な関心事は壁画が現存する石窟とその壁画主題の考察であり、石窟の組合せという更に重要な問題については極く僅かな注意が払われてきたにすぎない。これまでの発掘から、トユク東岸及び西岸の北部石窟群は、いずれも多層式の配置をとることが明らかになった。東岸区は、それぞれ新編号K一八窟、K三八窟（旧四一窟）、K五〇窟（旧四四窟）、K二七窟（旧三八窟）の四つの礼拝窟を中心に構成された四つのグループに分けられる。各グループは、基本的に礼拝窟に禅窟もしくは僧房窟を付加した構成であるが、それぞれに特色がある。

K一八窟は、大規模なグループの中心を成す。その下方のK二五窟は間口三間の殿堂式の建築で、日乾煉瓦積の壁体の上面が明らかに斜めになっていることから、当初の窟頂が片流れ式であったことが推測される。K二五窟は三壁にそれぞれ三層の壁画が描かれており（重画は数度にわたる）、壁画内容の判別は難しいものの、同窟が礼拝窟であることは明らかである。すると、K二五窟はK一八窟と塔・殿の組合せの関係にあるということになる。このことは、河西回廊武威天梯山石窟の北涼窟である第一八窟（中心柱窟）、第一七窟（仏殿窟、第一八窟の真上に位置）と一致する。K一八窟北側の上方と

下方に僧房窟（K一二窟、K二三窟）があり、南側には上下二層構成の僧房窟（K一五窟、K二〇窟）がある。このように、塔・殿を中心として周囲に僧房を組み合わせた形式は、四世紀の中原において出現した塔・殿を配置した伽藍構成と関連づけられよう。(15)

K三一、K三〇窟とK三二窟は一つのグループを形成する。三箇窟の配置は「品」字形を呈し、縦ヴォールト式天井の前室を共有する（挿図30）。K三一窟は縦長方形プラン、伏斗式天井の石窟である。窟内に壁画を描き、この石窟グループの主となる礼拝窟である。K三〇窟はやや規模が小さく、方形プランのドーム天井窟である。窟内中央に当初は塔柱があり、塔柱の左・右・後三壁面と窟内に壁画が残存する。グリュンヴェーデルの記述によると、塔柱の正面に凹状の光背をつくり、当初は立仏像を塑造していた。(16) 塔柱があらわされていることから、同窟は塔殿窟に属する。K三二窟は縦長方形プラン、ヴォールト天井である。正壁に一小室を開き、左右壁にもそれぞれ小型の禅室二つを開いており、典型的な禅窟に属する。窟内の観想図及び無量寿浄土図はおそらく後代に描かれたものである。(17) このように、同グループでは方形窟、塔殿窟と禅窟が組合せられている。



挿図30　東岸区K30 ― 32窟平面図

K五〇窟、K五四窟、K五五窟も一つのグループをなしており、三箇窟は同じ高度にならぶ。K五〇窟は前廊と主室を備える。前廊の両側に壁があり、その上部に垂木の跡が残る。発掘中にも塼製の屋根の部材が発見された。主室は方形プラン、平天井で、天井の中心が隆起してドームをなす。窟門の前に階段があり、窟内の中央に残高一・二メートルの方柱を設ける。これは基壇もしくは基座ともいわれてきたが、(18) 方柱の正面は凹状を呈し、龕形のように見える。したがって、この方柱はその上部に塑像を安置するための基壇ではなく、方形の塔柱であるに相違ない。その形状は或いは同窟の四隅に描かれている仏塔に類似して、塔身の正面に龕を開き、その内部に仏像を塑造していたのかもしれない。以上から、K五〇窟は方形プランの仏殿窟であり、内部に仏塔を安置した塔殿窟でもある。K五〇窟の南側には禅窟（K五四窟）と僧房窟（K五五窟）がある。K五四窟はK三二窟と同様、縦長方形プラン・ヴォールト天井である。正壁に小室一つを開き、左右壁はそれぞれ二つの禅室を開く。壁面には青灰を塗布しており、壁画は描かれない。K五五窟は方形プラン、ヴォールト天井で、窟内に日乾煉瓦を積んで炉をつくる。

NK二窟（中心柱窟）の西側上部には禅窟（既に崩落するが、後壁が残存、後壁に円形の小禅室を多数つくる）があり、下部に僧房窟がある。

K二七窟（旧三八窟）は中心柱窟であり、窟形式はK一八窟に近いが、地山に直接開鑿される点は異なっている。石窟は縦長方形プランで、中心柱は方形を呈する。正壁には本来、仏坐像を塑造していた。中心柱をめぐる左・

右・後の三面はヴォールト天井の甬道であり、甬道と中心柱の高さは等しい。当窟の下方にはK三六窟～K三八窟の一連の僧房窟がある。南側には比較的大型の僧房窟（K二八窟）がある。

上述の各グループの礼拝窟は、それぞれ主要な位置を占めている他、床面に塼を敷くか白灰を塗るのが通例であり、仕上げに配慮がなされている。このような現象は、トユク石窟の開鑿に際しては礼拝、起居、禅修など機能の異なる石窟が組み合わさって関係し、仏教寺院の基本的な機能を具備すべく考慮されたことを物語っている。したがって、一つの石窟グループはすなわち一つの寺院であると理解される。

それぞれの石窟グループは、K三〇窟（旧四〇窟）とK五〇窟（旧四四窟）では窟内に小型の仏塔が設けられているのを除いて、その他の礼拝窟はいずれも大型の中心柱窟であり、これらの石窟寺院が主に仏塔を中心とした空間構成をとることがわかる。

入塔観像のことは、仏典中に多数の記載が見られる。東晋・仏陀跋陀羅訳『観仏三昧海経』巻九「観像品」に曰く、

仏滅度後濁悪世中、諸衆生等欲除罪咎、欲於現世得須陀洹至阿羅漢、欲発三菩提心、欲解十二因縁、当勤修観仏三昧（中略）仏滅度後現前無仏、当観仏像、観仏像者（中略）先入仏塔、以好香泥及諸瓦土塗地令浄、随其力能焼香散華供養仏像、説已過悪礼仏懺悔、[19]

後秦の三蔵・鳩摩羅什訳の『思惟略要法』の「観仏三昧法」には、観像の後は静処に還り、閉目して思惟すべきことが明確に指示されている。

若念仏者、仏常在也、云何憶念、人之自身無過於眼、当観好像便如真仏、先従肉髻眉間白毫下至於足、従足復至肉髻、如是相相諦取、還於静處、閉目思惟、繫心在像、不令他念。若念餘縁摂之令還、心目観察如意得見、是為得観像定、[20]

この「還於静処」は、まさしく禅窟に関係する。『観仏三昧海経』巻十「念十方仏品」は、出定の後、塔に入って像を見じ、経典を誦持することについても述べる。「（前略）応当供養十方諸仏、云何供養、是人出定、入塔見像、念持経時、若礼一仏当作是念」[21]と。このように、礼拝窟の旁らに禅窟を付すことは、坐禅して観像する要請に合致したものといえよう。

（三）五世紀高昌における仏教図像の構成

五世紀は古代高昌仏教が勃興・発展した重要な時期であった。[22]トユク石窟は、この時期に開鑿された唯一の石窟寺院である。早期石窟の主要なものに新編号の第三〇窟、第三一窟、第三二窟、第五〇窟（旧四〇窟、旧四一窟、旧四二窟、旧四四窟）[23]がある。このたび発見された二つの礼拝窟は、開鑿年代が早いばかりではなく、壁画主題はいずれも上述のトユク早期石窟に見られなかったものである。したがって、新発見の石窟壁画をその他の早期窟の壁画と合わせて検討することで、五世紀高昌における仏教図像構成の一側面を反映させることができよう。

1　K一八窟

K一八窟は、中心柱正壁に大型の立仏像を塑造する。南甬道の比丘と俗人女性供養者列がいずれも西（窟門の方向）を向くという特徴は、塔を右繞礼

拝する宗教儀礼と合致していると同時に、大型の立仏像が窟内の礼拝の中心であることを示している。大仏を塑造している以上、K一八窟は大仏窟といえる。その他の壁面には壁画が描かれ、いずれも大型の一仏二菩薩像を主尊とする。窟前部はおそらく千仏を描いていたと思われる。K一八窟の塑像がその他の壁面の主尊と一具の関係にあるとするならば、このような組合せには二種類の可能性が考慮される。第一は、中心柱の四面を一具と見て、中心柱四壁の四仏と、左・右・後甬道外壁の三壁の三仏の組合せとする見方。第二は、窟内全体の塑像と壁画が組み合せられる関係にあり、七仏構成であるとする見方である。

第一種の組合せは、すなわち四方仏と三世仏である。四方仏について、北涼の三蔵・曇無讖訳の『金光明経』巻一「序品」は次の如く述べる。

諸経之王、若有聞者、則能思惟、無上微妙、甚深之義、如是経典、常為四方、四仏世尊、之所護持、東方阿閦、南方宝相、西無量寿、北微妙聲、我今当説、懺悔等法、所生功徳、為無有上、能壊諸苦、尽不善業、[24]

また『金光明経』巻一「寿量品」は次の如く述べる。

於蓮華上有四如来、東方名阿閦、南方名宝相、西方名無量寿、北方名微妙聲、是四如来自然而坐師子座上、放大光明照王舎城、[25]

四方仏については東晋仏陀跋陀羅訳の『観仏三昧海経』巻九「本行品」にも見え、[26]このくだりでは東方阿閦、南方宝相、西方無量寿、北方微妙声が「放身光明、儼然而坐」したことを記し、とりわけ次のように強調する。

四仏世尊従空而下、坐釈迦仏床讃言、善哉善哉、釈迦牟尼、乃能為於未来之濁悪衆生、説三世仏白毫光相、令諸衆生得滅罪咎、

このように、四方仏と三世仏は相互に関連づけられている。もっとも、中心柱の四仏は後壁がおそらく坐仏である他は全て立仏であり、経文に似つかわしくない。最も重要なのは、四仏が同等の位置におかれてはおらず、正壁の大立仏塑像の地位が突出していることである。したがって、四方仏と三世仏の組合せとする解釈には問題がある。

第二種は、これを七仏とする見方である。すなわち、過去荘厳劫末の毘婆尸、尸棄、毘舎の三仏と、現在賢劫の拘留孫、拘那含牟尼、迦葉、釈迦牟尼の四仏を合わせて過去七仏と称する。東晋の天竺三蔵・仏陀跋陀羅訳『観仏三昧海経』巻十「念七仏品」に曰く、

仏告阿難、若有衆生観像心成、次当復観過去七仏像、観七仏者当勤精進、昼夜六時勤行六法。端坐正受当楽少語（中略）毘婆尸仏偏袒右肩、出金色臂摩行者預告言、法子、汝行観仏三昧、得念仏心、故我来証汝（中略）釈迦牟尼仏身長丈六、放紫金光住行者前、弥勒世尊身長十六丈、如是諸仏各入普現色身三昧、現其人前、令其行者心得歓喜、以歓喜故、是諸化仏各申右手摩行者項、見七仏已、見於弥勒（中略）以是念仏三昧力故、十方諸仏放大光明現其人前、光明無比、三界特尊、[27]

ここから、K一八窟中心柱正壁の立仏塑像は釈迦仏であると推定できる。

中心柱左・右・後の三壁の三仏は、現在賢劫の初めの拘留孫・拘那含牟尼・迦葉仏であり、甬道外壁の三仏は過去荘厳劫末の毘婆尸・尸棄・毘舎の三仏であろう。この七仏は禅定中の行者の知見を証する役割があり、禅観の主要な対象の一つになっている。[28] また七仏の観想は、滅罪消障や未来世における成仏など多くの果報をもたらすという。[29] 七仏は中央アジアのガンダーラ地域で広く流行し、仏教彫刻作品にも多く見られる主題である。七仏と弥勒菩薩の像は一般には立像であらわされる。この主題は北涼時代にも甚だ流行し、トルファン・敦煌・酒泉・武威等で出土している北涼小石塔の八面に彫刻されているのがすなわち七仏と弥勒の図像であり、いずれも坐像であらわされている。[30] 以上から、K一八窟の塑像と壁画の組合せは七仏をあらわしたものとする解釈がより合理的と思われる。もしこのような推測が誤りでないとすれば、K一八窟は七仏の主題を主尊として塑造した最も早期の石窟であると言うことができる。六世紀の北魏から北周に至るまでの時期、甘粛の隴東地域に七仏をあらわした石窟が出現、流行した。例えば、北魏の涇州刺史、奚康生が開鑿した慶陽北石窟寺、涇川南石窟寺や、北周の大都督李允信が開鑿した天水麦積山上の七仏閣はいずれも大型の七仏窟であり、これらの淵源は或いはここに求められるのかもしれない。

なお、南甬道南壁に描かれる鎧をつけた龍王像は、『観仏三昧海経』巻七「観四威儀品」において、龍王がブッダに常住せられんことを請い願うという記述と関係する可能性がある。[31]

2　NK二中心柱窟

NK二窟の中心柱前部は欠失しており、本尊塑像の詳細は不明である。左・右・後甬道には塑像と画像の大立仏の列像が残存する。後甬道後壁中央の龕内には当初、仏坐像を塑造していた。この中央龕と両側の龕の間にそれぞれ大型の立仏像四体が描かれ、全て合わせて一坐仏と十立仏の構成となっている。後甬道前壁には、残存する壁画の華蓋からみて、約七体が描かれていたらしい。西甬道の中心柱側面の龕の北側には三体の立仏像が描かれており、同壁の構成は対称をなしていたであろうから、南側と合わせて本来は七体の像があったであろう。西甬道外壁中央の龕の北側には四体が描かれ、南側の状況は不明であるが少なくとも四体か、それより少し多かったと思われる。東甬道は全壊しているが、立仏の数は西甬道と同様であったに違いない。以上、三方の甬道の立仏の総数は五十体余りである。これらの大型の立仏像は、千仏の概念を以ては解釈し難い。宋・元嘉元年（四二四）西域の三蔵、畺良耶舎訳『仏説観薬王薬上二菩薩経』に五十三仏のことが見え、これも禅観の主要な対象の一つであった。[32] 経に曰く、

繫念三昧即於定中、得見薬上菩薩浄妙色身、即為行者称説過去五十三仏名（中略）時薬上菩薩説是過去五十三仏名已、黙然而住、爾時行者即於定中、得見過去七仏世尊毘婆尸仏而讃嘆言、[33]

もっとも、NK二窟の立仏が五十三仏と関連するか否かは、なお充分な証左に欠ける。[34] 甘粛の酒泉文殊山石窟千仏洞内の壁画にも立仏の列像がみえるが、その形像はやや小さく、壁面を通じて描かれていない。前壁上部は九段の千仏、その下方に立仏の列像があり、窟門の両側に各四体が配される。立仏の傍らには短冊形が附されるものの、残念ながら文字は既に模糊とする。立仏の下部には供養者の礼仏行列図を描く。[35] やはり、この種の大型の立仏列像は千仏と区別されるべきものといえよう。

3　K五〇窟（旧四四窟）

K五〇窟は方形プラン、平頂で、天井の中心は隆起してドームをなす。窟室中央に仏塔が設けられており、その正面は凹状を呈し、龕をつくるように見えるが、像は失われている。塔柱の側面に草泥層が少し残存するが、当初壁画が描かれていたのかは不明である。左・右・後壁の上部に九段の千仏を描き、各段は二四～二六体である。千仏の中央に一幅の説法図が配され、そのうち南北壁の説法図はいずれも一交脚仏と二脇侍菩薩からなる。正壁説法図の仏坐像は明瞭に見えないが、交脚仏のように見える。[36] 前壁窟門の上部に交脚弥勒菩薩と二脇侍菩薩からなる説法図、窟内四隅の上部にそれぞれ仏塔一基を描き、窟頂の四隅にそれぞれ護法天王像一体を配する。

このように、同窟の壁画の主尊は、仏交脚坐像三体と交脚弥勒菩薩像一体から構成されている。もっとも、この図像は三世仏と弥勒の組合せとは解釈し難い。

交脚仏は、亀茲石窟に多く見出される。亀茲壁画において、交脚仏は本生図と因縁故事図中の釈迦としてあらわされ、トユクにおいては主尊としてあらわされていることと異なっている。高昌以東の河西回廊と中原においても、五世紀に交脚仏が流行した。それでもなお、早期の交脚仏が弥勒仏であるとは全面的には肯定できないが、陝西省碑林博物館に収蔵される北魏・皇興五年（四七一）の交脚弥勒仏は、台座の発願文中の「何」像を造ると記すまさしくその部分が風化してはいるものの、背面の文字に「諸知識神期妙境、共睹（中略）（龍）華初曜、願在先会」という語が見え、学界では一般にこれを弥勒仏と認定している。六世紀初頭の北魏の造像中には、明確に弥勒と題する交脚仏像がある。例えば陝西省碑林博物館収蔵の北魏劉保生造像は交脚仏と二菩薩をあらわし、発願文の中で「敬造石弥勒像一区」と明記する。[37] 石窟造像に関しては、交脚仏の実例が比較的多くみられる。河西回廊の張掖金塔寺東窟では、壁面の中層に三つの龕が並列されている。このうち、東西両面の龕の主尊はいずれも説法印をとる交脚仏である。北壁は三坐仏をあらわし、南面（正壁）塑像は元代の重修である。金塔寺西窟中層後壁の主尊は交脚仏である。李玉珉氏は、この交脚仏は未来仏たる弥勒であり、東窟は三世仏の組合せであるという。また開鑿年代は五世紀五〇～六〇年代頃で、西窟の開鑿は五世紀七〇年代かこれをやや下る時期であるという。[38] 敦煌莫高窟第二六八窟正壁と第二五四窟中心柱正壁の本尊は交脚仏であり、これが弥勒か、それとも釈迦か、学界では未だに意見の一致をみていない。[39] とりわけ注意に値するのは、雲崗第九、一〇窟双窟において交脚弥勒菩薩と交脚仏が対を成してあらわされていることである。例えば、第九窟前廊東壁の第二層屋形龕の主尊は交脚弥勒菩薩であり、これと相対する西壁第二層屋形龕の主尊は交脚仏である。第一〇窟前廊東西壁第二層の龕は、交脚仏と交脚弥勒菩薩像に分けられ、その位置は第九窟とちょうど反対である。[40] ここから、交脚仏はすなわち下生の弥勒仏像であり、交脚弥勒菩薩像と上生・下生の関係にあることがわかる。[41] 以上のように、五世紀の河西回廊と中原において、交脚仏が一定の流行をみたことがうかがえる。K五〇窟（旧四四窟）の開鑿年代は上述の諸作例と大体同じ時期であり、しかも窟内の壁画が河西回廊の石窟の影響を受けていることは明らかである。したがって、K五〇窟の三壁の説法図にみえる交脚仏はおそらく弥勒仏、すなわち弥勒下生成道の姿と確定してよい。三壁三弥勒仏の組合せは、弥勒が下生成道し、華林園の龍華樹下において三会の説法を行い、衆生を普く済度する形相を表現したものに違いない。[42] 同窟の前壁窟門上部に交脚弥勒菩薩の説法図を描いているのは、弥勒が

兜率天宮に上生した形相を表現したものであろう。したがってK五〇窟の壁画においては弥勒の上生と下生の図像が一窟内に集められており、同窟は典型的な「弥勒窟」であるといえよう。

4　K三一（旧四一窟）

K三一窟は縦長方形プラン、伏斗式天井で、窟内の三壁に千仏図像を描く。［各壁の］千仏の中央にそれぞれ一仏二菩薩からなる説法図を描き、三世仏と千仏を構成する図像である。伏斗式天井の四面に立仏の列像を描く。

5　K三〇窟（旧四〇窟）

K三〇窟の窟室中央には当初、塔柱が設けられ、塔柱の左・右・後三壁面と周壁に壁画が残存する。[43] グリュンヴェーデルの記述によると、塔柱の正面に凹状の光背をつくり、当初は立仏像を塑造していた。塔柱の左・右・後の三面にはそれぞれ一体の立仏像を描く。窟内両側壁の下部には些か奇異な画面が描かれ、後壁壁画も残存するものの大部分が欠損する。図版資料を欠くため、グリュンヴェーデルが述べる奇異な壁画が一体どのような内容であったのか判断し難いが、グリュンヴェーデルは一連の壁画の主題を菩薩の捨身に関わるものであるといい、象の四足が残存する画面については須達拏本生と推測している。現在、第四〇窟の壁面上部の壁画は失われており、下部も残存する壁画は極めて僅かであるが、薩埵太子捨身飼虎図の画面の一部が認められる。[44]

K三〇窟の図像構成は、中心柱正面に立仏を塑造すること、余の三面にそれぞれ一立仏を描き、中心柱の四面が四仏構成をなすことなどはK一八窟に類似する。しかし、これが北涼・曇無讖訳『金光明経』序品と東晋・仏陀跋陀羅訳『観仏三昧海経』本行品に述べられる「東方阿閦、南方宝相、西無量寿、北微妙声」の四方仏であるのかは、判断が難しい。

以上を踏まえると、五世紀高昌における仏教図像の主要な構成は以下の如くである。

1　単幅で一立仏と二菩薩立像、或いは一坐仏と二菩薩立像を一具とする説法図
2　七仏、三世仏と千仏の組合せ
3　弥勒上生・下生、千仏と四天王の組合せ
4　四方仏？
5　『賢愚経』と『雑宝蔵経』に基づく本生・因縁故事図

上述の諸主題は、本生・因縁故事を除いては、全て禅観の対象であり、『観仏三昧海経』と密接に関係する。『観仏三昧海経』には弥勒像と千仏の観想のことは述べられていないが、観想の効験によって「除六十劫生死之罪、未来生處必見弥勒、賢劫千仏威光所護（中略）若坐不見、当入塔観、入塔観時、亦当作此諸光明想、至心合掌、跏跪諦観、一日至三日心不錯乱、命終之後生兜率天、面見弥勒菩薩色身端厳、応感化導[45]」、「当来生處値遇弥勒、乃至楼至仏、於千仏所聞法受化[46]」することがかなうという。

当然のことながら、弥勒信仰の流行は、北涼の統治者による宣導や、[47] 安陽侯沮渠京声が高昌で翻訳した『観弥勒菩薩生兜率天経』[48]、鳩摩羅什が長安で翻訳した『弥勒下生成仏経』と関連していたであろう。[49]

四、結論

古代高昌国は西域諸国と河西回廊を連結する交通の要衝であると同時に仏

教石窟芸術が西から東に伝播する上での結節点でもある。新資料の出現により、トユクの早期石窟は窟形式・絵画手法等の上で、亀茲石窟・甘粛早期石窟と密接に関係することが明らかになった。更に重要なのは、塑像と壁画の主題が西域仏教の一中心地である于闐の影響を受けていることであるが、このことは従来、認識されていなかった。

まず石窟形式について述べると、新出のK一八窟は中心柱正壁に大型の立仏像を塑造し、中心柱の左・右・後部を中心柱より低いヴォールト天井の甬道とする。窟前部[補註4]は奥行きが浅く幅が広く、天井の形式は不明である。このような形式は亀茲地域のキジル石窟の大仏窟と比較的近く、高昌地域で初めて発見された大仏窟の実例といえよう。大仏を塑造すること、大仏窟を開鑿することは亀茲仏教の伝統であり[50]、例えばキジル石窟第四七窟など、キジルでは四～五世紀には既に流行していた。K一八大像窟の発見は、亀茲における大仏窟の開鑿という理念が、高昌・河西回廊（例えば、張掖・馬蹄寺石窟第一窟[51]、武威・天梯山石窟第一五窟・第一六窟[52]など）を経て、大同の雲崗石窟大仏窟（曇曜第五窟、第九窟・第一〇窟・第五窟[53]）の開鑿に影響を与えたことを明らかに示している。

先述の如く、K一八窟とNK二窟は中心柱をめぐる左・右・後の三面を天井高の低いヴォールト天井式甬道とするが、これは亀茲石窟の中心柱窟と大像窟に近似する[54]。トユク石窟のこれよりやや下る時期の石窟、例えばK二七窟（旧三八窟）、西岸の旧第二・一二窟の甬道は高さが中心柱とほぼ等しい。このことは河西回廊の酒泉文殊山石窟中心柱窟、張掖馬蹄寺石窟第一窟と基本的に同じであり[55]、中心柱窟甬道の変遷の経路において、トユク石窟が重要な一環にあたることを反映するものである。

K五〇窟（旧四四窟）とK三〇窟（旧四〇窟）は方形窟であり、平天井の中央が隆起してドームをなす。その中心に蓮華を描き、ドームの曲面を放射条に分割してそれぞれに立仏を描いており、これも亀茲石窟の方形窟にしばしば見られる形式である。高昌以東における方形プラン礼拝窟の中では、僅かに寧夏の固原須弥山石窟北魏晩期窟――例えば第一七、一九窟[56]――のみにしかこの類の形式が見られず、その淵源はトユク石窟と関係すると考えられよう。

K三一窟（旧四一窟）の伏斗式天井は亀茲石窟には見られないが、河西回廊以東では多く見られる形式であり、例えば武威天梯山の北涼窟である第一窟・第四窟・第一八窟が挙げられる[57]。張掖金塔寺石窟においては、五世紀に開鑿された東窟・西窟はいずれも伏斗式天井である[58]。筆者の調査によると、金塔寺東窟の伏斗式天井の西面にも立仏の列像が描かれており、この点K三一窟（旧四一窟）と共通している。以上の特徴は、トユク石窟が甘粛早期石窟から影響を受けたことを示している。

K三二窟（旧四二窟）、K五四窟と西岸の第一窟（旧編号）はいずれも禅窟であり、正壁に小禅室一つ、左右壁にはそれぞれ二つの小禅室を開く。この種の窟形式は亀茲石窟には見出せないが、クチャのスバシ寺院址に類似の遺構がある。河西回廊西部の敦煌莫高窟第二六八窟[59]、酒泉文殊山石窟などには同様の禅窟がある[56]。酒泉より東ではこの類の禅窟は見られない。

次に、塑像と壁画の題材について見ていくと、新発見の中心柱窟の壁画主題は、K一八窟では左右甬道の両側壁に大型の一仏二菩薩の立像、七仏、龍王を描き、後甬道の後壁には八体の菩薩像を描く。NK二中心柱窟は周壁に大立仏の列像をめぐらし、後甬道の西端に二体の特異な護法神像を描く。以上は、トユク石窟にこれまで知られていなかった主題である。その他の早期石窟には三世仏、一仏二菩薩からなる説法図、弥勒上生・下生図、千仏等

がみられ、五世紀前後に高昌地域で大乗仏教が流行していたことがわかる。これは亀茲で盛行していた小乗仏教の題材とは明らかに異なっており、その影響の源は于闐や河西石窟に関係すると考えられる。

七仏、一仏二菩薩と千仏は、全て甘粛の早期石窟において流行した主題であり、例えば敦煌・酒泉・トルファンから出土している北涼石塔は全て七仏を主題にしている。また、炳霊寺石窟第一六九窟の前秦建弘元年（四二〇）造像の塑造無量寿仏龕三尊像及び、前秦の壁画に見られる一仏二菩薩像は、現在知られている最も早い三尊像の実例である。とりわけ第一六九窟の前壁において千仏中に一仏二菩薩の説法図が描かれることは、トユクK五〇窟、K四一窟と同様である。[61] 大型の一仏二菩薩立像の形式も、第一六九窟上部に塑造三尊像を見出すことができる。以上のように、トユク早期石窟は甘粛早期石窟と密接に関係することが看取される。

しかし、一仏二菩薩の構成は、大乗仏教が流行した于闐においても多くみとめられる形式である。『法顕伝』に記載されるように、法顕は四〇一年に于闐に到達し、同国について「僧衆乃数万人、多大乗学」と記す。王室と寺院が組織した行像を見るために、法顕はやや長く逗留し、「作四輪像車、高三丈余、状如行殿、七宝荘厳、懸絵幡蓋、像立車中、二菩薩（脇）侍」[62]と記す。このように、行像に用いられたのは一仏二菩薩像であった。

前述の如く、NK二窟の甬道内に大立仏の列像を配することは、河西回廊以東の地域には見られないが、ホータン洛浦県ラワク寺院址で回廊内外壁に大立仏の列像を塑造することと合致する。また、K一八窟南壁の仏像とその左側の菩薩との間に一体の小仏像が描かれることも、ラワク寺院の回廊塑造に同様の表現がみとめられる。[63] よって、ここに于闐からの影響が明らかに看取される。

また、K五〇窟（旧四四窟）の本生故事画が依拠する『賢愚経』も于闐に由来する。南朝梁の僧祐新撰『賢愚経記』には、同経の淵源が次のように述べられている。

河西沙門釈曇学、威徳等、凡有八僧、結志遊方、遠尋経典、於于闐大寺遇般遮于瑟之会、般遮于瑟者、漢言五年一切大衆集也、三蔵諸学、各弘法宝、説経講律、依業而教、学等八僧、随縁分聴、於是競習胡音、折以漢義。精思通訳、各書所聞、還至高昌、乃集為一部、既而踰越流沙、齎到涼州、于時沙門釈慧朗、河西宗匠、道業淵博、総持方等、以為此経所記、源在譬喩、譬喩所明、兼載善悪、善悪相翻、則賢愚之分也、前代伝経、已多譬喩、故因事改名、号曰賢愚焉。元嘉二十二年、歳在乙酉、始集此経。[64]

したがって、これまでホータン地域に実例は知られていないものの、これらの本生故事画の粉本は于闐に由来する可能性がある。

K一八窟の龍王像は、火焔宝珠冠を戴き、鎧を身につけ、頭上には四頭の龍が見える。龍王像の源は亀茲石窟に関係すると見られる。例えば、クムトラ石窟第四二窟（現行編号の第五八窟）はドイツ隊によって龍王洞と命名されているように、門壁右側の上部に着甲し、頭上に蛇形の龍頭をあらわした龍王像が描かれている。[65] もっとも、K一八窟においては、既に亀茲式の蛇形の龍から漢式の龍へと変化をとげている。この種の龍王像は、高昌以東には見出せない。また、K一八窟の龍王像が戴く火焔宝珠冠は、六角柱状の宝珠の上部に三条の火焔があらわされており、同様の冠がK一八窟南甬道北壁左側の菩薩像にもみとめられる。このような形状の火焔宝珠は亀茲石窟中に頻

出するものの、亀茲では冠には用いられない。

また絵画技法について見ると、トユク石窟の人物像（仏・菩薩・供養者を含む）は主に赤褐色・青・緑・白などの色彩を用いて描かれている。如来像と菩薩像には、亀茲地域で流行した暈取り法が採用されており、肌を露出した部分に濃色から淡色へ段階的に着色され、凹凸の効果を出して裸身の立体感をあらわしている。このような暈取り法の影響は、河西回廊とその東の甘粛・永靖炳霊寺石窟にまで及び、この種の絵画技法の東伝にあたってトユク石窟が重要な一環であったことは明らかである。

歴史的背景を見ると、前涼建康十五年（三二七）に張駿が高昌郡を設置して以来、後涼、西涼、北涼に至るまで、高昌は河西の諸王朝に帰属していた。[66] 四三九年、北涼が北魏によって滅ぼされると、沮渠無諱は西行して高昌に拠り、四四三年、高昌に建都した、四六〇年、柔然はこの北涼を滅ぼし、闞伯周を高昌王に擁立して高昌国を建てた。政権は、闞・張・馬氏と次々に交替した。四九九年、高昌の旧人は馬儒を殺し、麴嘉を王に立てた。すなわち、麴氏高昌国時代の始まりである。[67]

高昌郡の設置と北涼の西遷により、漢人文化の伝統を保有した河西の民衆が高昌地区へ大量に流入したことは、中原文化の影響が高昌以西の地域に伝播する上で極めて大きく作用した。例えば、K一八窟の一仏二菩薩像の壁画に漢式の榜題が残ること、窟内南壁に漢式の服制の女性供養者像がみとめられること、またK五〇窟の本生因縁図と西岸区の僧房窟前室の壁画に漢文榜題が残ることから、これらの石窟を開鑿したのが漢人、もしくは漢人文化の影響を深く受けた異民族であったことがわかる。トユク石窟では、曾て、東晋元康六年（二九六）の『諸仏要集経』等の早期の経典が出土した。[68] とりわけ重要なのは、北涼の流亡政権である涼王沮渠安周の供養経が出土していることであり、少なくともトユク石窟が北涼政権と密接な関係があったことは明かである。[69] 今回出土した早期の写経断片の主なものに鳩摩羅什訳の『法華経』、『思益梵天諸問経』があり、文字は古拙な隷書体を示すことから、五世紀初に鳩摩羅什が長安において諸経典を訳出してから久しからずしてこれらが高昌に伝わったと考えられる。ここには、高昌と中原仏教の密接な関係が充分に反映されているといえよう。

トユク石窟に于闐・河西回廊・亀茲石窟それぞれの特色を帯びた諸相がみとめられることは、高昌が西域と中原の仏教文化・芸術が交わる地であり、シルクロードの早期石窟寺院芸術が伝播する道筋において重要な地位を占めていたことを物語っているのである。

註

（1）東岸・西岸各区の発掘簡報は、いずれも既に発表した。中国社会科学院考古研究所辺疆民族考古研究室、吐魯番研究院、亀茲研究院「新疆鄯善県吐峪溝東区北側石窟発掘簡報」（『考古』二〇一二年第一期、七～一六頁）。同「新疆鄯善県吐峪溝西区北側石窟発掘簡報」（『考古』二〇一二年第一期一七～二二頁）。

（2）Demetrius Klementz, *Turfan und seine Alertumer in Nachrichten uber die von der Kaiserlichen Akademie der Wissenschaften zu St. Petersburg in Jahre 1898 ausgerustete Expedition nach Trufan*, St. Petersburg, 1899, pp. 1-54.

（3）グリュンヴェーデル（Albert Grünwedel）率いる第三次ドイツ探検隊は、一九〇六年一二月三一日から一九〇七年一月十一日まで、吐峪溝において十二日間の調査を行った。その記録によると、当時クレメンツ編号第六窟はまだ崩落していなかったらしい。

グリュンヴェーデル著、趙崇民・巫新華訳『新疆古仏寺―一九〇五～一九〇七年考察成果』中国人民大学出版社、二〇〇七年、五八一～六一〇頁。原著Grünwedel, Albert, *Altbuddhistische Kultsätten in Chinesisch-Turkistan, Bericht über Archäologische Arbeiten von1906 bis 1907, bei Kuča, Qarašahr und in der Oase Turfan*, Berlin, 1912, pp. 317-332.

（4）一九一四年十一月、スタイン（Marc Aurel Stein）はトユクに到って盗掘を行ったが、同窟の状況に関しては記録していない。スタインが発表している東岸区の不鮮明な写真を見ると、石窟上部の仏塔は既に見えないが、中心柱をめぐる甬道はほとんど崩れていなかったようである。
スタイン著・巫新華等訳『亜州腹地考古図記』（広西師範大学出版社、二〇〇四年、第二巻、図三一〇）。原著 Stein, Marc Aurel., *Innermost Asia: Detailed Report of Explorations in Central Asia, Kan-su and Eastern Iran*, Oxford, 1928, vol. 2, (photo) 310.

（5）賈応逸「吐峪溝石窟探微」（新疆芸術編集部編『絲綢之路造型芸術』、新疆人民出版社、一九八五年、二七四～二八九頁。
同「吐峪溝石窟第四四窟與敦煌北涼洞窟比較研究」（敦煌研究院編『敦煌石窟研究国際討論会文集・石窟考古編』、遼寧美術出版社、一九九〇年、一八四～一九七頁）。

（6）柳洪亮「高昌石窟概述」（中国壁画全集編集委員会編『中国新疆壁画全集６ 吐峪溝・柏孜克里克』遼寧美術出版社・新疆美術出版社、二〇〇六年、一～二二頁）。
同「吐峪溝千仏洞四四窟因縁故事画小考―兼論四四窟的年代」（田衛疆、趙文泉編『鄯善歴史文化論集』新疆人民出版社、二〇〇六年、三〇〇～三〇八頁）。
同「由吐峪溝第四四窟佐証莫高窟早期三窟的年代」（敦煌研究院編『一九九〇年敦煌学国際研討会文集・石窟考古編』遼寧美術出版社、一九九五年、五六～六二頁）。

（7）敦煌研究院の見解によると、敦煌で最も早い石窟は第二六八、二七二、二七五窟であり、北涼時代の開鑿である。
樊錦詩・馬世長・関友恵「敦煌莫高窟北朝洞窟的分期」（敦煌文物研究所編『中国石窟・敦煌莫高窟 一』文物出版社、一九八二年、一八五～一九七頁）。
宿白氏は「莫高窟現存早期洞窟年代問題」と題する論考の中で、敦煌早期石窟の開鑿年代は北魏太和八～一八年（四八四～四九四）の間であり、しかも首都平城の雲崗石窟から影響を受けたことが明らかであるといい、これらの石窟を北魏時代の開鑿と位置づけている（宿白『中国石窟寺研究』文物出版社、一九九六年、二七〇～二七八頁）。

（8）釈僧祐『出三蔵記集』（中華書局、蘇晋仁・蕭鍊子点校本刊印、一九九五年、五九頁、『大正蔵』五五―一二頁ｃ）。

（9）「蓮華夫人縁」、「婆羅門婦欲害姑縁」はそれぞれ下記に見える。
吉迦夜・曇曜訳『雑宝蔵経』巻一（『大正蔵』四―四五一頁ｃ～四五二頁ｂ）。同経巻十（『同』四―四九八頁ｂ～ｃ）。

（10）『出三蔵記集』（前掲註８）六二～六三頁、『大正蔵』五五―一三頁ｂ。

（11）スタイン著、中国社会科学院考古研究所訳『西域考古図記』第三巻（広西師範大学出版社、一九九八年、附図二六頁、楼蘭ＬＡ遺址とＬＢ遺址の間の建築群の仏塔平面図と見取図）。原著 *Serindia: Detailed Report of Explorations in Central Asia and Westernmost China*, Oxford, 1921, vol.3, Fig. 26, sketch plan and section of ruined stupa between groups L. A. and L. B. 'Lou-Lan' site.

（12）甘粛省文物考古研究所編『河西石窟』（文物出版社、一九八七年、一一頁、図一一、文殊山千仏洞平面・立断面図、同書一二頁、図一二、文殊山万仏洞平面・立断面図）。
馬蹄寺第一窟は筆者の調査資料に基づく。

（13）雲崗石窟文物保管所編『中国石窟 雲崗石窟二』（文物出版社、一九九四年、図一六一）。

（14）スタイン著、巫新華等訳『古代和田―中国新疆考古発掘的詳細報告』（山東人民出版社、二〇〇九年。原著 Stein, Marc Aurel., *Ancient Khotan, Detailed Report of Archaeological Explorations in Chinese Turkestan*, Oxford, 1907.）五四三頁、図六六「南側外壁の巨大な塑像の図」を参照。ラワク仏教寺院址の年代について、スタインは遺跡中から出土した百枚以上の「五銖」銭と塑像の様式に基づき、三～七世紀に位置づけている。このスタインの見解は、草創年代と存続年代を含めたおおよその期間と解される。実際は、ラワク寺院址の存続年代は非常に長く、後代の重修・塑像の補填がかなり多い。塑像の中には唐代の様式の仏頭がみとめられることから、少なくとも唐代まで存続したことは確実である。

（15）塔・殿の配置に関する比較的早期の実例に、後趙時代の鄴城仏教寺院址がある。釈慧皎「仏図澄伝」（湯用彤校注本刊印『高僧伝』巻九、中華書局、一九九二年、三五二～三五四頁）の記載によると、西域の高僧、仏図澄（本姓帛、亀茲の人か）は道術を以て後趙の石勒・石虎父子を教化し、後趙では「民多奉仏、皆営造寺廟、相競出家」という。建武一四年（三四八）七月、石虎の二子「石宣、石韜将図相殺。宣時到寺、與澄同坐、浮図一鈴独鳴（中略）至八月、澄使弟子十人齋於別室、澄時暫入東閤。虎與後杜氏問訊澄、澄曰、脇下有賊、不出十日。自仏図以西、此殿以東、当有流血、慎勿東行也（中略）後二日、宜果遣人害韜於仏寺中」。

（16）註３の前掲書六〇三頁（原著三二七頁）、図六五八ａ、苦修者洞を参考のこと。当窟の窟頂には相当大きな亀裂が走っており、随時崩落の危険がある。現在、支柱を多く用いて支えている。窟内には多量の土砂が堆積して未整理のままであり、窟内に中心塔柱が存在するかは現時点ではまだ不明である。

（17）宮治昭氏は、トユク石窟第一、二〇、四二窟等の禅観窟の壁画年代は、高昌国時代後半期の六世紀中葉から七世紀中葉頃とするのが妥当であるという。宮治昭著・賀小萍訳『吐峪溝石窟壁画與禅観』（上海・古籍出版社、二〇〇九年、一一八頁）

を参照。もっとも宮治氏の見解は漠然としており、具体的に第四二窟の年代を見るならば氏の見解より幾らか遡るに相違ないが、果たして五世紀まで遡るかについてはなお詳細な研究が必要である。

(18) 賈応逸氏はこの中央の土台について「おそらく基座の跡と思われ、地面に立仏の両足の痕跡がみとめられる」という（註5の前掲「吐峪溝石窟第四四窟與敦煌北涼洞窟比較研究」一八五頁）。同窟に関しては我々も整理を行ったが、仏足の痕跡は確認できなかった。

(19) 仏陀跋陀羅訳『観仏三昧海経』巻九「観像品」（『大正蔵』一五―六九〇頁b）。

(20) 鳩摩羅什訳『思惟略要法』中「観仏三昧法」（『大正蔵』一五―二九九頁a）。

(21) 仏陀跋陀羅訳『観仏三昧海経』巻十「念十方仏品」（『大正蔵』一五―六九四頁b）。

(22) 羽渓了諦著、賀昌群訳「高昌之仏教」（『西域之仏教』商務印書館、一九九九年、二〇六～二〇九頁、原著『西域之仏教』法林館、一九一四年、四〇二～四二二頁）。

(23) K二七窟（旧第三八窟）の状況は複雑であり、開鑿年代はある程度早いものの、壁画は早いものと下るものがあり、うち早い壁画は麴氏高昌国時代のものである。ここでは詳細に述べない。

(24) 曇無讖訳『金光明経』巻一「序品」（『大正蔵』一六―三三五頁b）。

(25) 曇無讖訳『金光明経』巻一「寿量品」（『大正蔵』一六―三三六頁a）。

(26) 仏陀跋陀羅訳『観仏三昧海経』巻九「本行品」（『大正蔵』一五―六八八頁c～六八九頁a）。「（前略）当文殊上即変化成四柱宝台、於其台内有四世尊、放身光明儼然而坐、東方阿閦、南方宝相、西方無量寿、北方微妙聲、時四世尊以金蓮花散釈迦仏、未至仏上化華帳（中略）宝帳成已、四仏世尊従空而下、坐釈迦仏床讃言、善哉善哉、釈迦牟尼、乃能為於未来之世濁悪衆生、説三世仏白毫相、令諸衆生得滅罪咎、所以者何、我念昔曾空王仏所出家学道、時四比丘共為同学、習学三世諸仏正法、煩悩覆心、不能堅持仏法、宝蔵多不善業当堕悪道、空中聲言、汝四比丘、空王如来雖復涅槃、汝之所犯謂無救者、汝等今当入塔観仏、與仏在世等無有異。我従空聲入塔観像眉間白毫相、即作是念（中略）生生常見十方諸仏、於諸仏所受持甚深念仏三昧、得三昧已、諸仏現前授我記別。東方有国、国名妙喜、彼土有仏、号曰阿閦、即第一比丘是、南方有国、国名曰歓喜、仏号宝相、即第二比丘是。西方有国、国名極楽。仏号無量寿、第三比丘是、北方有国、国名蓮花荘厳、仏号微妙聲、第四比丘是」

(27) 仏陀跋陀羅訳『観仏三昧海経』巻十「念七仏品」（『大正蔵』一五―六九三頁a～c）。

(28) 鳩摩羅什訳『禅秘要法経』巻中もまた次のように説く。「見釈迦牟尼仏影已、復得見過去六仏影、是時諸仏影、如頗梨鏡、明顕可観、各伸右手、摩行者頂。諸仏如来、自説名字。第一仏言、我是毘婆尸、第二仏言、我是尸棄、第三仏言、我是毘舎、第四仏言、我是拘楼孫、第五仏言、我是迦那含牟尼、第六仏言、我是迦葉毘、第七仏言、我是釈迦牟尼仏、是汝和上、汝観空法、我来為汝作証。六仏世尊、現前証知見」（『大正蔵』一五―二五四頁a）。

(29) 『観仏三昧海経』巻十「念七仏品」において、毘婆尸仏は次のように説く。「若有衆生聞我名者礼拝我者、除却五百億劫生死之罪、汝今見我消除諸障、得無量億旋陀羅尼、於未来世当得作仏」（『大正蔵』一五―六九三頁b）。

(30) 殷光明『北涼石塔研究』（覚風仏教芸術文化基金会、二〇〇〇年）。トルファンで出土した北涼石塔には、宋慶塔ともう一基の小仏塔がある。小仏塔のことは、曇無讖訳『大般涅槃経』巻二十一「光明遍照高貴徳王菩薩品」のなかの偈に見える（『大正蔵』一二―四九一頁b）。また、以下も参照。張宝璽『北涼石塔芸術』（上海辞書出版社、二〇〇六年）。

(31) 『観仏三昧海経』巻七「観四威儀品」は次の如く述べる。「爾時龍王長跪合掌、勧請世尊、唯願如来常住此間、仏若不在、我発悪心無由得成阿耨多羅三藐三菩提、唯願如来留神垂念常在於此、殷懃三請如是不止（中略）爾時如来即便微笑、口出無量百千光明、一一光中無量化仏、一一化仏万億菩薩以為侍従、時彼龍王於其池中、出七宝台奉上如来、唯願天尊受我此台。爾時世尊告龍王曰、不須此台、汝今但以羅刹石窟持以施我（中略）仏告阿難、汝教龍王浄掃石窟、諸天聞已、各脱宝衣競以払窟、爾時如来還摂身光、巻諸化仏来入仏頂、爾時如来、勅諸比丘皆在窟外（中略）龍王歓喜発大誓願、願我来世得仏如此、仏受王請経七日已、王遣一人乗八千里象、持諸供具遍一切国供養衆僧、到處皆見釈迦文仏」（『大正蔵』一五―六八〇頁c～六八一頁a）。

(32) 釈慧皎「曇良耶舎伝」は次の如く述べる。「西域人、性剛直、寡嗜欲、善誦阿毘曇、博渉律部、其余諸経、多所該綜、雖三蔵兼明、而以禅門専業、毎一遊観、或七日不起、常以三昧正受、伝化諸国、以元嘉之初、遠冒沙河、萃於京邑、太祖文皇深加歎異、初止鐘山道林精舎。沙門宝志崇其禅法、沙門僧含請訳薬王薬上観、及、無量寿観、含即筆受、以此二経是転障之秘術、浄土之洪因、故沈吟嗟味、流通宋国」（『高僧伝』巻三、湯用彤校注本刊印、中華書局、湯用彤校注本刊印、一九九二年、一二八頁、『大正蔵』五〇―三四三頁c）。

(33) 曇良耶舎訳『仏説観薬王薬上二菩薩経』（『大正蔵』二〇―六六三頁c～六六四頁a）。

(34) 北魏石窟においても五十三仏の主題が見られるが、全て千仏形式であらわされている。例えば、龍門古陽洞西壁W三一龕（黄元徳造像弥勒龕）は弥勒菩薩龕で、龕上と左右に五十三仏を彫刻する。発願文は次の通り。「大代永平四年二月十日清信

士五品使□黄元徳弟王奴等敬造弥勒像一区並五十三仏」劉景龍・楊超傑『龍門石窟内容総録』第九巻（大百科全書出版社、一九九八年、五頁、図二四四）。山西省高平羊頭山石窟の北魏晩期の開鑿である第八窟西壁に「五十三仏主李欣、妻張福女」と題記が刻され、傍らに千仏をつくる。以上は筆者の調査に基づく。

(35) 正壁の千仏には全て榜題が附されており、上から七段目に連続して並ぶ四体の千仏については「満月仏」、「月光仏」、「無量力仏」、「大力王仏」の字が残るが（註12の前掲書、図一二七）、これらの仏名は現存する仏名経に一緒には見えない。無量力仏は『仏説仏名経』に十方仏のうちの西方仏として見え、大力王仏については記載が見出せない。よって、同窟の千仏は別本に拠ったものと思われる。

(36) 南北壁の説法図については註6の前掲書（『中国壁画全集』六）図一八・二〇を参照。賀世哲氏は東・南・北壁の「仏は皆、菩提樹下に交脚して坐す」という。賀世哲『敦煌図像研究―十六国北朝巻』甘粛教育出版社、二〇〇六年、一六頁。

(37) 西安碑林博物館編『西安碑林仏教造像芸術』陝西師範大学出版社、二〇一〇年、四六・四七頁図版「皇興五年（四七一）造像」、五一頁図版「劉保生夫婦造弥勒像」、四九頁図版「北魏景明三年（五〇二）劉保生造無量寿仏造像」は仏像の形状が劉保生夫婦造の弥勒像と一致していることから、この二件の像主の劉保生は同一人物と見られ、造像年代もほぼ同じ頃であろう。

(38) 李玉珉「金塔寺石窟考」『故宮学術季刊』二二―二、二〇〇四年、三三―六六頁。

(39) 敦煌文物研究所編『中国石窟 敦煌莫高窟 一』文物出版社、一九八二年、図六「第二六八窟西壁」、図二八「第二五四窟中心柱正壁。

(40) 水野清一・長廣敏雄『雲崗石窟―西暦五世紀における中国北部仏教窟院の考古学的調査報告』第六巻（京都大学人文科学研究所、一九五一年）、図六「第九窟前室東壁線図」、図七「第九窟前室西壁線図」、『同』第七巻（同、一九五二年）図五「第一〇窟前室東西壁線図、図六「第一〇窟前室東西壁線図」。

(41) 第九、一〇窟の窟内主尊の造像について、第一〇窟の造像は損壊が甚だしいが、残存する痕跡から判断して交脚弥勒菩薩と見られ、左側は菩薩半跏像、右側は菩薩倚坐像で後代に重彩される。第九窟正壁は風化が甚だしいが仏倚坐像であり、両側の脇侍は菩薩立像二体である。一般に、両窟の本尊はそれぞれ釈迦と弥勒菩薩と考えられている。李静傑氏はこれを弥勒仏と弥勒菩薩であるという。李静傑「関於雲崗第九第十窟的図像構成」（『芸術史研究』一〇、二〇〇八年、三二七～三五九頁）。筆者はこの観点に賛同するものであり、この双窟が組み合せられる関係にあることから、上生と下生の弥勒を組み合わせた形式を代表していると考える。

(42) 例えば、後秦の鳩摩羅什訳『仏説弥勒下生成仏経』は次の如く述べる。「爾時弥勒仏於花林園、其園縦広一百由旬、大衆満中、初会説法、九十六億人得阿羅漢。第二大会説法、九十四億人得阿羅漢、第三大会説法、九十二億人得阿羅漢、弥勒仏既転法輪度天人已、将諸弟子入城乞食、無量浄居天衆恭敬」（『大正蔵』一四―四二五頁a～b）。

(43) 註3の前掲書六〇三頁（原著三二九頁）。

(44) 『中国壁画全集』六』（註6の前掲書）図一の捨身飼虎図を参照。薩埵太子の捨身飼虎説話は、下記に見える。
北魏・涼州沙門慧覚等訳『賢愚経』巻一「摩訶薩埵以身施虎品」（『大正蔵』四―三五二頁b～三五三頁b）。
北涼・曇無懺『金光明経』巻四「捨身品」（『大正蔵』一六―三五三頁c～三五六頁c）。

(45) 『観仏三昧海経』巻二「観相品」（『大正蔵』一五―六五六頁a～b）。

(46) 『観仏三昧海経』巻二「観相品」（『大正蔵』一五―六五八頁b）。畺良耶舎訳『三劫三千仏縁起』は「其中千人者、拘留孫仏為首下至楼至仏，於賢劫中次第成仏」といい、楼至仏は賢劫千仏の最後の一尊であることがわかる（『大正蔵』一四―三六四頁c）。

(47) 中書郎夏侯粲作の「沮渠安周造寺功徳碑」には「以隆法施之弘弥勒菩薩」、「雖曰法王、亦賴輔仁、於鑠弥勒、妙識淵鏡」「藹藹龍華、寝巾俟聘、名以表宝、像亦載形」、「望標理翰、普式兜率、経始法館、興国民願」とあり、北涼王沮渠安周が弥勒上生・下生信仰を抱いていたことが示されている。賈応逸「沮渠安周造寺功徳與北涼高昌仏教」（『新疆仏教壁画的歴史学研究』中国人民大学出版社、二〇一〇年、三三四～三四三頁）。

(48) 釈僧祐『出三蔵記集』巻二に次の記載がある。「前二観（『観弥勒菩薩上生兜率天経』、『観世音観経』）先在高昌郡久已訳出、於彼齎来京都」（六一頁、『大正蔵』五五―六一三頁a）。沮渠京声は常に曇無懺に従って訳経に従事しており、北魏が北涼を滅した後、南朝の宋に逃れている。したがって、両経の翻訳は、四三九年以前と考えられる。

(49) 釈僧祐『出三蔵記集』巻二、五〇頁。

(50) 宿白「新疆拝城克孜爾石窟部分同窟的分期與年代」『中国石窟寺研究』、文物出版社、一九九六年、三七～三八頁。

(51) 馬蹄寺石窟第一窟と第二窟は隣合う中心柱窟である。第一窟の前部は人字披天井で、中心柱の正壁に大型の立仏像を彫出する。中心柱の余の三面は龕を開かず壁画を描く。同窟の造像は後代に重彩される。石窟形式はK一八窟とほぼ同様である。

(52) 天梯山石窟第一五、一六窟は損壊が甚だしいが、その形状は方形窟であったと見

られ、後壁に大仏の痕跡が残る。大仏を塑造することから、大仏窟に分類される。敦煌研究院、甘粛省博物館編『武威天梯山石窟』文物出版社、二〇〇〇年、図四八「第一五窟平面図及立面図」、図四九「第一六窟平面及立面図」。

(53) 雲崗第九窟・第一〇窟・第五窟の主室正壁はいずれも大型の仏像を彫出し、これをめぐる甬道式の礼拝道があり、亀茲石窟大像窟の甬道と類似する。

(54) 新疆維吾爾自治区文物管理委員会・拝城県克孜爾千仏洞文物保管所・北京大学考古学系編『中国石窟・克孜爾石窟』一、文物出版社、一九八九年、二五一頁「第三十八窟実測図」、二五二頁「第四十八窟実測図」。

(55) 註12の前掲書、一一頁、図一一「文殊山千仏洞平面・立断面図」、図一二「文殊山万仏洞平面・立断面図」。馬蹄寺第一窟は筆者の調査資料に基づく。

(56) 寧夏回族自治区文物管理委員会・北京大学考古系編『須弥山石窟内容総録』文物出版社、一九九七年、図一五「第一七窟」、図一八「第一九窟」。

(57) 註52の前掲書、図三二「第一窟平面及中心柱窟立面図」、図三七「第一窟平面及中心柱四面立面図」。

(58) 註12の前掲書、四頁、図三「金塔寺東窟平面・立断面図」。

(59) 敦煌研究院編『莫高窟第二六六～二七五窟考古報告』第二冊（文物出版社、二〇一一年）図一五「第二六八窟平面図」。同書の編者は第二六八窟について「壁画の最下層は草泥の上に白粉を塗っており、壁画は描かれない。これは窟内で最も早い段階を示す部分である。この上から約一センチメートルの厚さで草泥を塗り、壁画（第一層壁画）を描く（『同』第一冊、九五頁）。

(60) 禅窟は文殊山の後山区にあり、主室は長方形プラン、縦ヴォールト天井である。窟室正壁と左右壁にそれぞれ二個の小禅室を開く。

(61) 甘粛省文物考古隊・炳霊寺文物保管所編『中国石窟　炳霊寺石窟』文物出版社、一九八九年、図二〇「西秦建弘元年（四二〇）龕。図一五「東壁千仏及一仏二菩薩説法図。図四一、南壁上部には立仏像一体と左側の塑造菩薩立像が残存し、右側の菩薩は光背が部分的に残存する。

(62) 釈法顕撰、章巽校注『法顕伝　校注』（上海古籍出版社、一九八五年、一三～一四頁）。

(63) 註14の前掲書五四五頁、図六八、回廊東南角の塑像。図版では、大型の仏像の間に非常に小さな仏像を確認できる。

(64) 釈僧祐『出三蔵記集』巻九、三五一頁、『大正蔵』五五―六七頁c。

(65) 註3の前掲書、五六頁、図六一（原著三二頁）。

(66) 魏収『魏書』「高昌伝」の記載によると「晋以其地為高昌郡、張軌、呂光、沮渠蒙遜拠河西、皆置太守以統之」（中華書局、一九七四年、巻一〇一、二二四三頁）。

(67) 王素『高昌史稿　統治編』文物出版社、一九九八年。

(68) 池田温『中国古代写本識語集録』東京大学東洋文化研究所、一九九〇年、図一。

(69) 賈応逸「鳩摩羅什訳経和北涼時期的高昌仏教」中の「高昌出土的北涼仏経」を参照（註47の賈応逸前掲書、三一八～三二一頁）。

（Li, Yuqun 中国社会科学院考古研究所辺境考古研究中心）

訳者註

（補註1）原文では、ドイツ隊やスタインの調査報告など参照する場合、註に中文訳書の情報が挙げられている。底本となった原著の書誌情報も併せてあげられているものの、頁があげられておらず、また一部に表記の誤認があったので、和訳に際して、追加・訂正をして中文訳書と原著の書誌情報とともにあわせて提示した。

（補註2）後述のＮＫ八窟の窟前を指すとみられる。

（補註3）原文のこの箇所は誤認とみられる。正しくは「高昌・北涼時代（四四二～四六〇年）」か。

（補註4）原文では「前室」と表記する。

（訳者　もり　みちよ・早稲田大学文学学術院助手）

挿図　出典一覧

挿図8　Grünwedel, Albert., *Altbuddhistische Kultstätten in Chinesisch-Turkistan*, Berlin, 1912.（以下、*Kultstätten*）, fig. 644a を転載。

挿図14　*Kultstätten*, fig. 642 を転載。

挿図15　*Kultstätten*, fig. 649 を転載。

挿図29　Stein, Marc Aurel., *Ancient Khotan*, Oxford, 1907. photo. 68 を転載。

挿図30　*Kultstätten*, fig. 658 を転載。

※原著　李裕群「吐魯番吐峪溝石窟考古新發現―試論五世紀高昌佛教圖象」『藝術史中的漢晋與唐宋之變』（顔娟英・石守謙 主編、石頭出版社、二〇一四年二月）

（本翻訳論文は平成二五年度海外編集委員による推薦論文である）